学苑・生活環境学科紀要　No. 789　19～53（2006・7）

イギリス都市広場形態についての考察

――2005年第19回海外都市広場調査報告――

芦川　智・金子友美
高木亜紀子・鴨居朋子

The Report on the Form of City Square in Great Britain

—The Field Survey of City Squares in Foreign Countries No.19—

Satoru ASHIKAWA, Tomomi KANEKO,
Akiko TAKAGI and Tomoko KAMOI

This was a rather small-scaled survey compared with previous ones and we drove 2694 km in 2 weeks in a limited area in Scotland and England. The number of city squares surveyed this time was 38 in 24 cities including London.

Among them 15 squares were so-called 'street type', 16 were 'non-street type' with the open area in the shape of a square, and 7 were a combination of the 'street type' and the 'square type'. We also looked at various stone symbolic "Crosses" that stood in many squares.

Key words: city square（都市広場）, open space（空地）, field survey（フィールド調査）, community space（コミュニティー空間）

（1）はじめに

都市の広場に目を向けて研究の対象としたのは1984年のことであり，現在（2005年）で，21年目となる。当研究室における継続的研究テーマ，10年間の中心課題として，海外都市広場の調査を始めたのが1990年である。調査報告は今回で15年目であるが，調査自体は19回目となる。以下にこれまでの調査実施状況を示す。

第1回は，東ヨーロッパ（ドイツ，ポーランド，チェコスロバキア，ハンガリー，ユーゴスラビア5カ国）を対象として行われ，第2回は東ヨーロッパ（ハンガリー，ルーマニア，ブルガリア）とトルコ，ギリシャ，イタリアの6カ国を対象とした。第3回はトルコ，ギリシャ2カ国を対象とし，第4回は，北欧とフランドルを中心としてドイツ，スイス，フランスを付加。第5回はアラビア半島南端のイエメンを，第6回はイタリア北部地域を対象として行われた。第7回は，モロッコ，ポルトガル，スペインの3カ国で実施され，第8回は，南仏，スペイン，ポルトガルの3カ国であった。第9回調査は，第6回の北部イタリアを補完するべく南部イタリアを対象地域とした。第10回調査は，ヨーロッパ中央部であるドイツを中心に，その周辺部を含めて対象地域とした。第11回調査は，第10回調査の補完の意味を含めてポーランドとベネルクス3国を対象地域とした。第12回調査は，チベットとネパールを対象地域とし，第13回目の調査はロシア・バルト3国とした。第14回目調査は中国蘇州周辺と三江周辺の2地域とした。第15回目調査はフランス，スイス，イタリアで実施し，2000年にヨーロッパで実施した駅空間の調査等の報告も加えている。第16回目の調査はインドネシアのバリ島とし，第17回調査はフランス南西部とした。第18回調査はインド北部地域で行った。今回の第19回目のイギリス調査は海外都市広場調査の最終と考えている。

（2）調査計画

第1回調査: 東ヨーロッパ（ドイツ，ポーランド，チェコスロバキア，ハンガリー，ユーゴスラビア5カ国）
［平成2年9月初旬から25日間実施］
第2回調査: 東ヨーロッパ（ハンガリー，ルーマニア，ブルガリア，トルコ，ギリシャ，イタリアの6カ国）
［平成3年8月初旬から28日間実施］
第3回調査: トルコ，ギリシャ2カ国
［平成4年7月末から27日間実施］
第4回調査: 北欧とフランドルを中心としてドイツ，スイス，フランスを加えた地域
［平成5年9月初旬から18日間実施］

第5回調査: アラビア半島南端のイエメン
［平成6年5月に13日間実施したが，内戦勃発のため中断，平成7年5月に再度実施］
第6回調査: イタリア北部地域
［平成6年7月末から25日間実施］
第7回調査: モロッコ，ポルトガル，スペインの3カ国
［平成7年8月21日から29日間実施］
第8回調査: 南仏，スペイン，ポルトガルの3カ国
［平成8年9月2日から24日間実施］
第9回調査: 南イタリアを中心として北イタリア，オーストリアを加えた地域［平成9年8月21日から25日間実施］
第10回調査: 中欧地域としてドイツを中心にチェコ，フランスを加えた3カ国
［平成10年8月10日から27日間実施］
第11回調査: ポーランド，ベネルクス3国の4カ国
［平成11年8月2日から22日間実施］
第12回調査: チベット，ネパールの2カ国
［平成12年8月24日から15日間実施］
第13回調査: ロシア，バルト3国等の7カ国
［平成13年8月4日から27日間実施］
第14回調査: 中国蘇州周辺及び三江周辺
［平成14年8月29日から14日間実施］
第15回調査: フランス，スイス，イタリアの3カ国
［平成15年8月25日から21日間実施］及びイギリス，フランス，スイス，イタリアの4カ国［平成12年9月14日から25日の12日間実施］，鶴田佳子の単独調査地を付加。
第16回調査: インドネシアのバリ島
［平成16年3月14日から6日間実施］
第17回調査: フランス南西部
［平成16年9月16日から10日間実施］
第18回調査: インド北部地域
［平成17年3月12日から24日の13日間実施］
第19回調査: イギリス地域
［平成17年9月2日から15日の14日間実施］

(3) 調査概要

① 調査対象国: イギリス

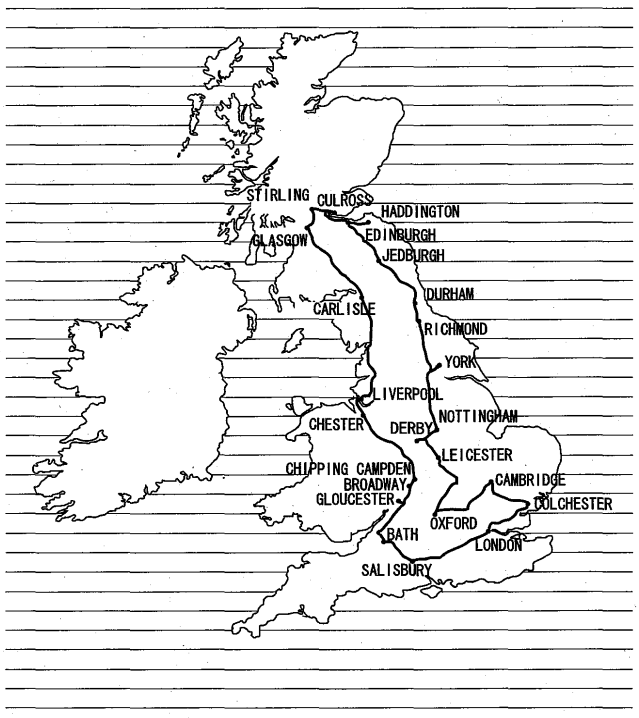
② 実施期間: 2005年9月2日～9月15日の14日間

③ 調査メンバー

調査研究責任者: 芦川　智
（昭和女子大学生活機構研究科教授）
調査研究責任補助者: 金子　友美
（昭和女子大学生活環境学科講師）
同　　: 高木亜紀子
（昭和女子大学生活環境学科助手）
調査研究スタッフ: 鴨居　朋子　（本学生活環境学科4年）
同　　: 野村　麻美　（本学生活環境学科4年）
同　　: 市島侑里枝　（本学生活環境学科3年）
同　　: 土井彩恵子　（本学生活環境学科3年）
同　　: 西濱　芳子　（本学生活環境学科3年）
調査協力者: 芦川　紀子
（九州大学音響設計学科助教授）

④ 調査日程及び調査行程図（図－1）

1. 9月2日（金）TOKYO→LONDON
2. 9月3日（土）LONDON（37 km）
3. 9月4日（日）LONDON→(STONEHENGE)→SALISBURY→(SOUTHAMPTON)（253 km）
4. 9月5日（月）(SOUTHAMPTON) →BATH→(CARDIFF) →GLOUCESTER（322 km）
5. 9月6日（火）GLOUCESTER→BROADWAY→CHIPPING CAMPDEN→CHESTER（311 km）
6. 9月7日（水）CHESTER→LIVERPOOL→CARLISLE（272 km）
7. 9月8日（木）CARLISLE→GLASGOW→STIRLING→CULROSS→EDINBURGH（264 km）
8. 9月9日（金）EDINBURGH→HADDINGTON→JEDBURGH→(NEWCASTLE UPON-TYNE)（214 km）



図－1　調査行程図

9. 9月10日（土）（NEWCASTLE UPON-TYNE）→DURHAM→RICHMOND→YORK→（SHEFFIELD）（301 km）
10. 9月11日（日）（SHEFFIELD）→NOTTINGHAM→DERBY→LEICESTER→OXFORD（317 km）
11. 9月12日（月）OXFORD→CAMBRIDGE→（COGGESHALL）（261 km）
12. 9月13日（火）（COGGESHALL）→COLCHESTER→LONDON（142 km）
13. 9月14日（水）LONDON→
14. 9月15日（木）→TOKYO

※（　）内の距離数は車での移動距離を示す。

（4） 調査内容と方法

調査準備は文献収集から始まる。文献資料から調査対象候補都市を選定し，その都市図と調査すべき広場の状況を把握し，歴史的経緯を読みとる作業を例年のごとく行った。一都市に広場は多く存在するが，その都市の中心となる空間を探し，そこに存在する広場を対象としていくことが原則である。

目標の都市に到着すると，その都市の市街地図や道路標識などを手がかりとし，現地の住民にヒアリングをしながらセンターゾーンにアプローチする。都市のセンター概念の明確な今回の場合は比較的センターと広場が対応している場合が多かった。

① **調査内容**: 具体的な調査内容は以下のようになる。

- 測定・作業: 平面形態（平面図の作成），規模の測定，ファサードの記録（ビデオ，写真），関係資料の収集（地図，パンフレット，絵はがき，文献等）
- 観察・確認項目: 都市における位置，広場名称，広場機能，周辺建築の種別
- その他: 各調査員による観察・ヒアリング等

② **調査機材**: カメラ，ビデオ，距離測定機器，コンベックス，スケッチブック等

（5） 調査の結果とその概要

今回の調査は期間が2週間ということで，走行距離も2694 kmと従来の夏の調査で行う規模に比べて若干小規模で行われた。しかもグレート・ブリテン島の限られた範囲での調査となった。しかし，2週間で調査した都市の数はロンドンを含めて24都市，その中で扱った広場の数は38広場である。そしてイギリス全体（THE UNITED KINGDOM OF GREAT BRITAIN AND NORTHERN IRELAND）の中ではイングランドとスコットランドを対象とした調査となった。調査結果で得られた38広場のリストを図－2　第19回海外都市広場調査リストに示す。

（6） イギリスの都市広場の特徴

調査結果を概観すると，得られた24都市38広場からは明確な特徴がみえてくる。

調査事例を平面形態の特徴から分類すると，39事例中（(GBR-05-30）は2事例として扱った）街路型16事例，非街路型16事例，両者が一体となった複合型が7事例である。まず街路型と非街路型に二分でき，街路型が半数をしめることが特徴である。また非街路型のガーデン・スクエア型（詳細は（7）参照）にも特徴がみられる（図－3）。

他のヨーロッパ地域において，広場は誰もが自由に利用することのできる公共空間であるが，ロンドンでは，ガーデン・スクエアにみられるような私的空間としての広場が発展した。広場はそこを取り囲む建物の住人のための空間であり，鍵のかかった柵で囲われ，プライバシーが保たれた空間となっている。

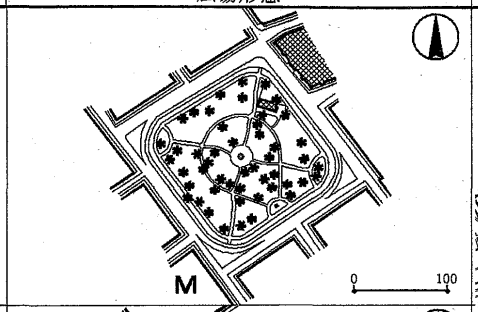
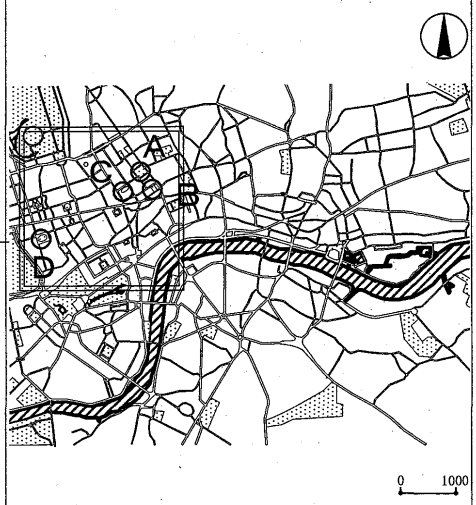
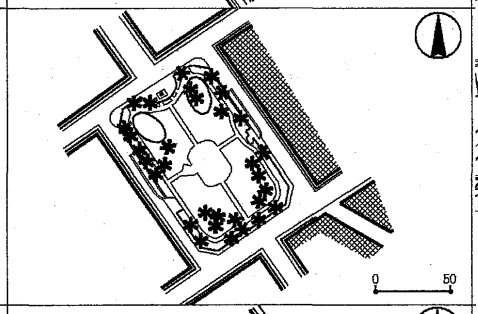
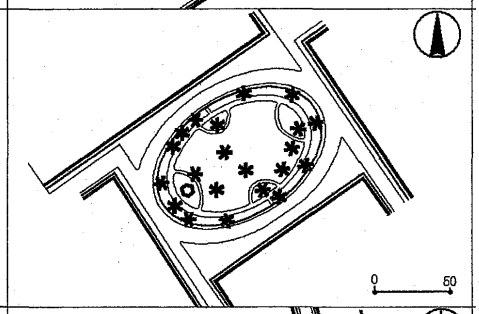
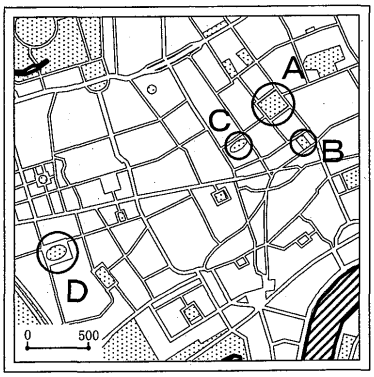
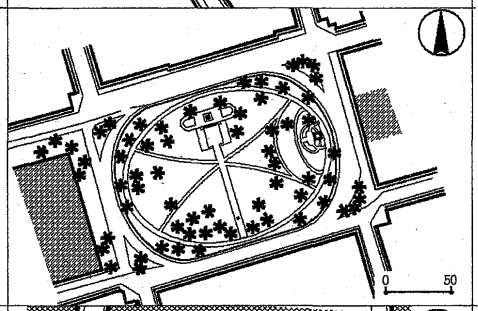
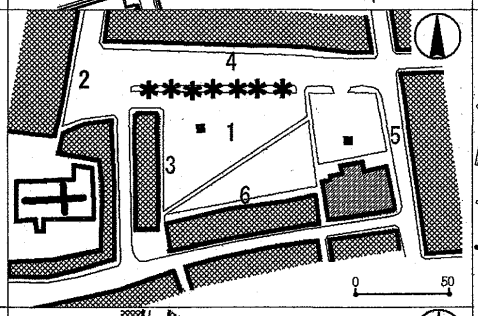
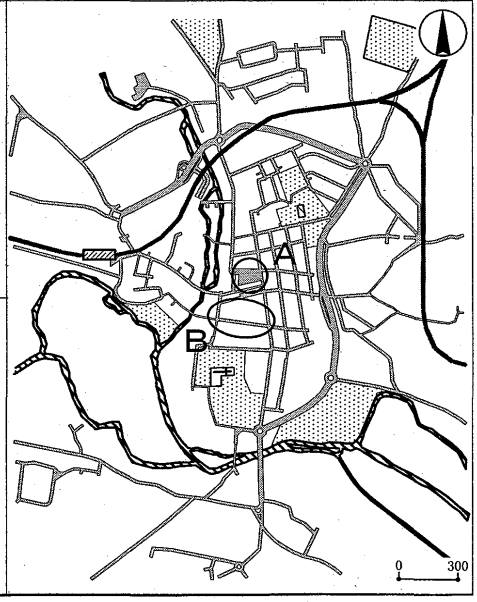
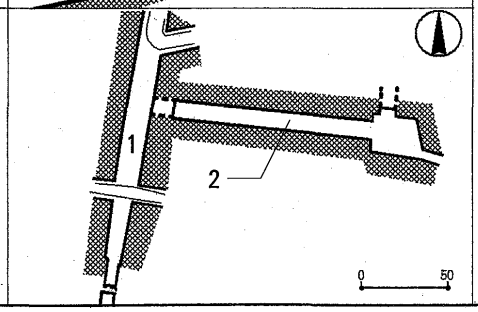
そうした背景からか，イギリスでは1本あるいは複数の通りが町の中心を構成する，街路型広場が多くみられた。非街路型は，いわゆる一般的な，面的な広がりをもつ広場である。ガーデン・スクエア型7事例を除いて9事例であるが，そのほとんどが市場広場，教会周囲広場であり，街路型広場のサブ的な広場として使用されていた。

複合型は，街路型と非街路型が一体となっているタイプである。その中には街路と街路の交差部が膨らみをもち，広場となっている交差部膨らみ型が5事例あった。いずれも街路が付属しており，街路型の要素も併せもつ。

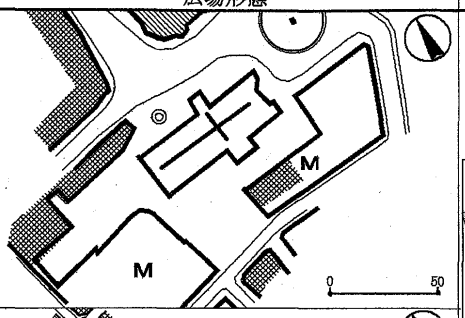
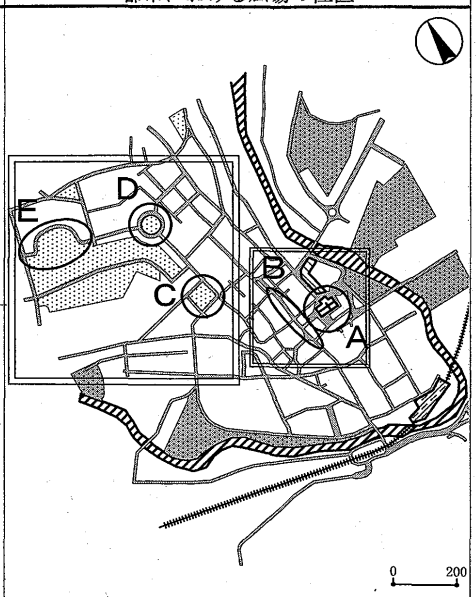
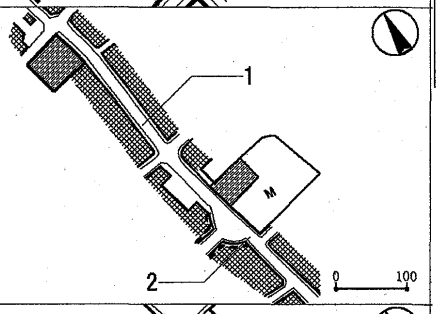
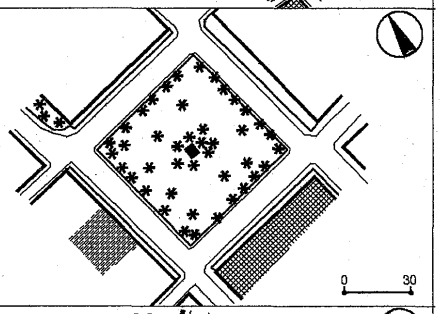
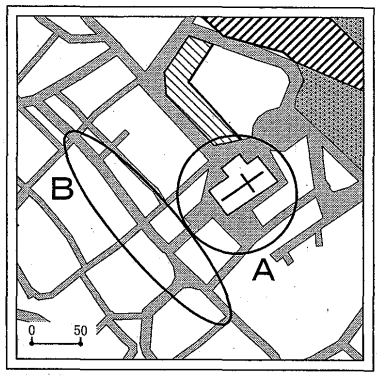
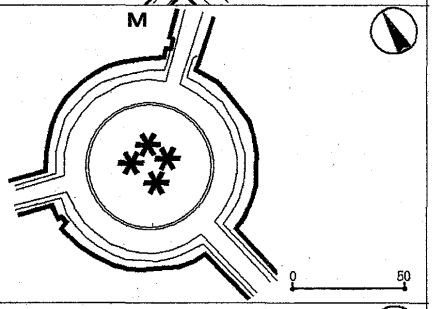
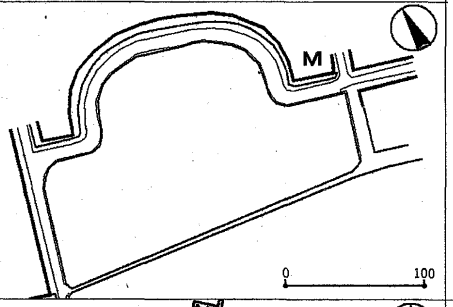
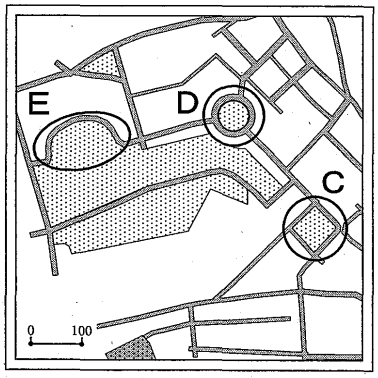
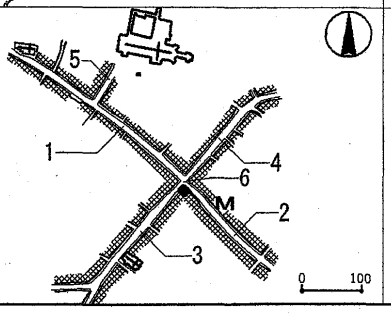
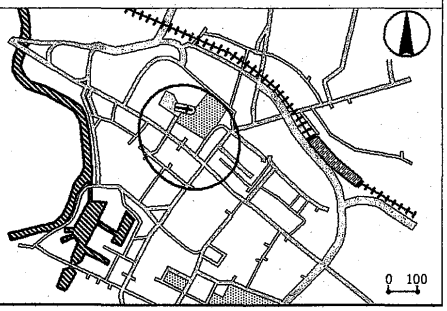
こうした街路型広場はこれまでの調査において，スイスやスイス国境付近のドイツ南西部に多くみられた。これらの地域に街路型広場が多いのは，起伏に富んだ地形という立地条件が理由のひとつにあると考えられる。ヨーロッパ地域でのイギリスは地理的特性，歴史的経緯が他と違うという意味で独特な形態が生まれてきたのも当然と思われる。ガーデンスクエアの形態，ハイストリートの街路型のタイプがイギリスの特性の一つと言えるのではないだろうか。

街路が単なる街路ではなく，街路型広場として機能するためには，幅員が広い，あるいは膨らみをもつ，歩行者優先の空間となっているなどといった形態的特徴や，商業施設が連なる，市が開かれるといった商業的中心地である，市庁舎や教会などの主要施設が面し，都市センター機能を担う，といった機能的特徴が必要となる。イギリスの街路型広場もこうした特徴をもち，町の中心を構成し，地元の人や観光客の集まる場所となっていた。

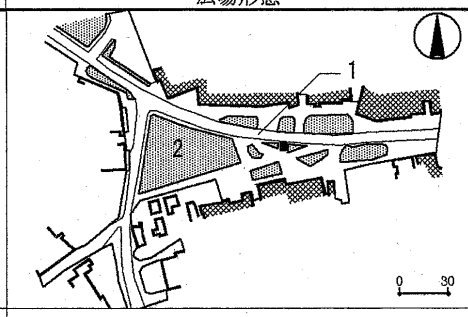
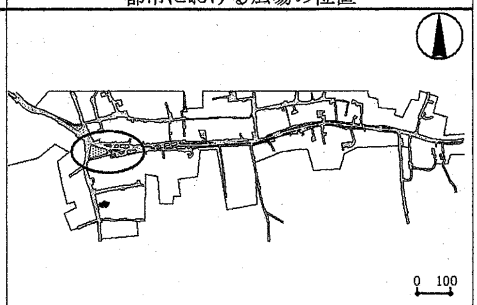
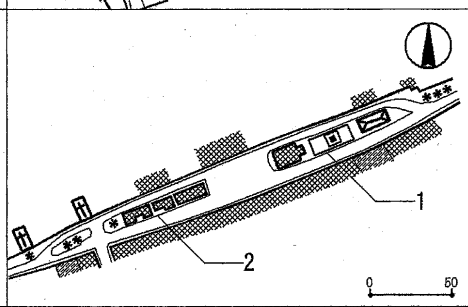
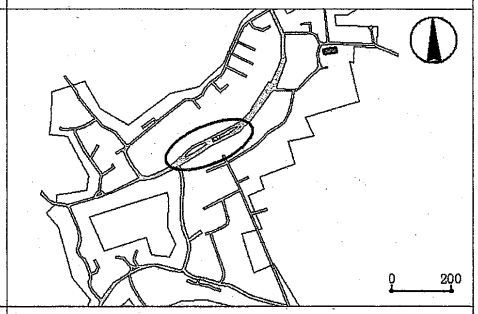
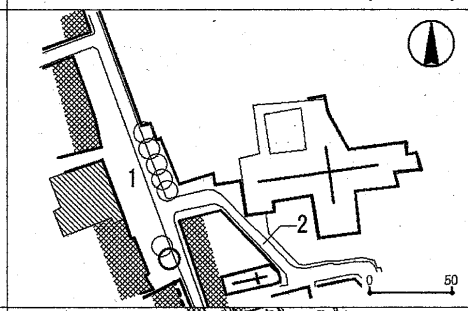
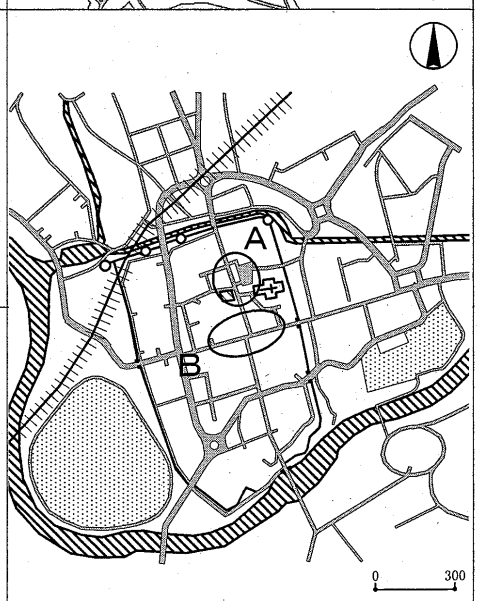
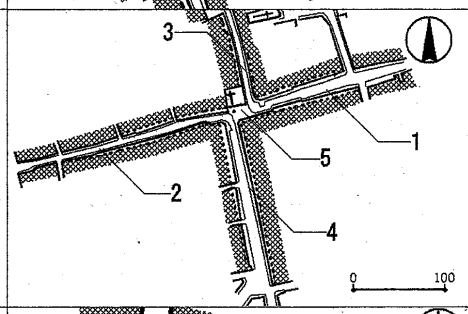
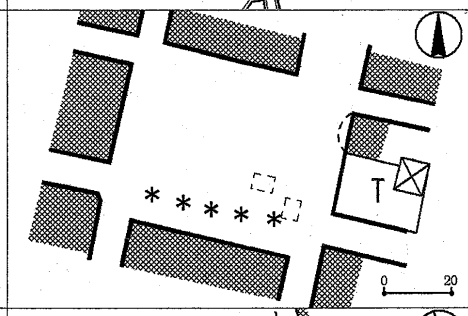
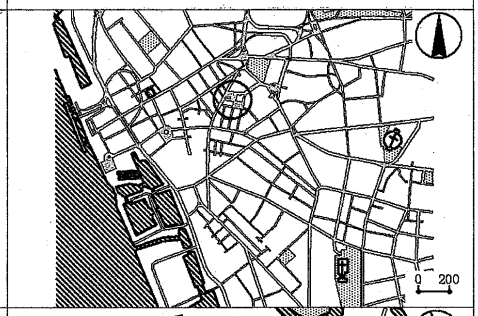
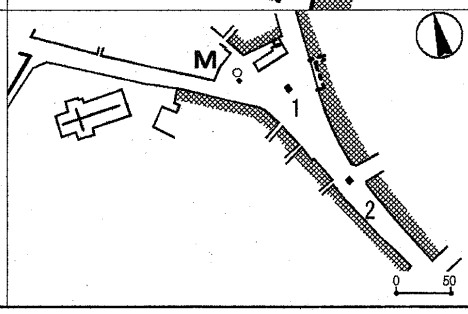
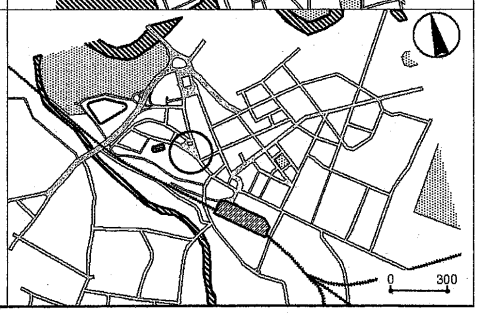
図－2　第19回海外都市広場調査リスト

CODE	国・都市・広場名称	広場形態	都市における広場の位置
GBR-05-01	国　：GREAT BRITAIN 都市：LONDON 広場名称： RUSSELL SQUARE A		
GBR-05-02	国　：GREAT BRITAIN 都市：LONDON 広場名称： BLOOMSBURY SQUARE B		
GBR-05-03	国　：GREAT BRITAIN 都市：LONDON 広場名称： BEDFORD SQUARE C		
GBR-05-04	国　：GREAT BRITAIN 都市：LONDON 広場名称： GROSVENOR SQUARE D		
GBR-05-05	国　：GREAT BRITAIN 都市：SALISBURY 広場名称： 1) MARKET SQUARE 2) CHEESE MARKET 3) OATMEAL ROW 4) BLUE BOAR ROW 5) QUEEN STREET 6) OX ROW A		
GBR-05-06	国　：GREAT BRITAIN 都市：SALISBURY 広場名称： 1) HIGH STREET 2) OLD GEORGE MALL B		

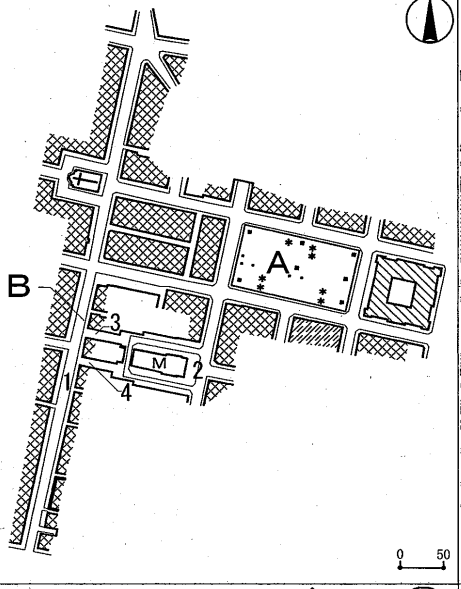
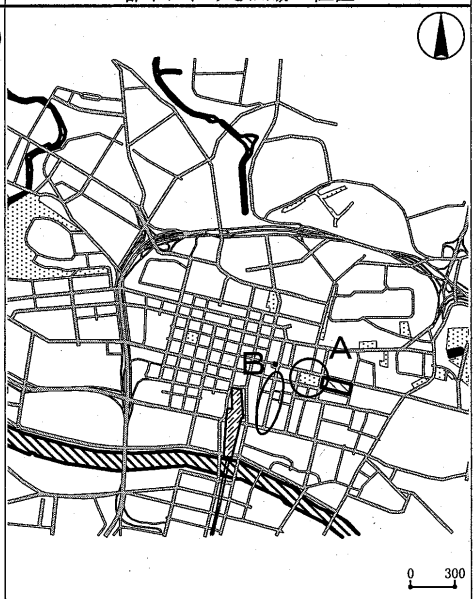
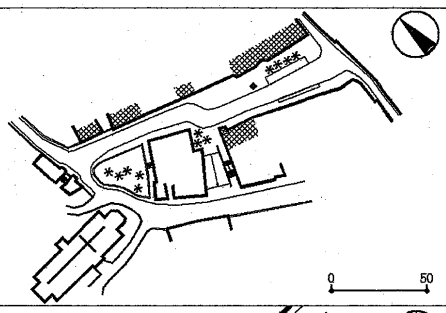
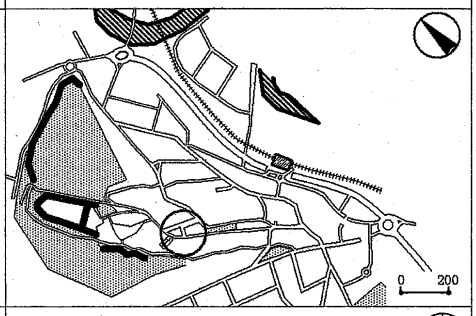
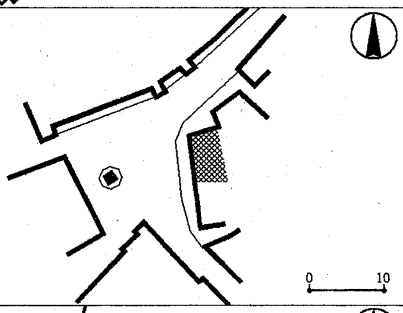
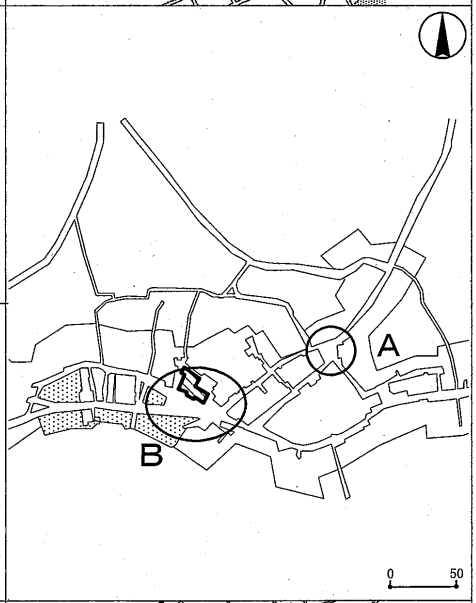
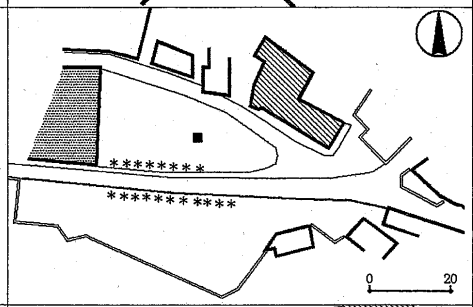
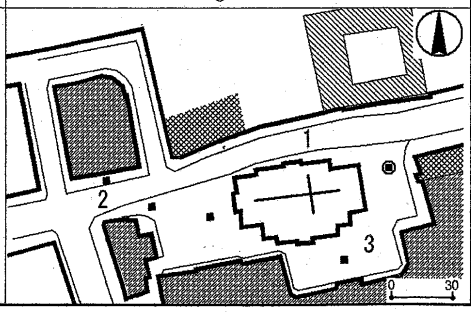
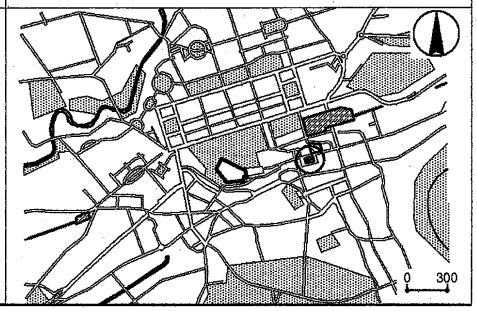
規模	広場機能	周辺建築物	資料	都市および広場の概要
40807㎡	憩いの広場	ロンドン大学 大英博物館 ホテル 商業施設 ロウ・ハウス ベドフォード公爵フランシスの像 噴水 カフェ	資料001 資料017 資料003 資料018 資料004 資料019 資料006 資料021 資料007 資料031 資料008 資料032 資料009 資料033 資料010 資料101 資料011	ロンドンでも最大級の広場で，1800年に第5代ベドフォード公爵サー・フランシス・ラッセル卿（1763～1805）が自分の屋敷を庭園師のハンフリー・レプトン氏（1725～1818）につくらせた。中央部に円盤型をした噴水があり，それを囲むように花壇がある。姿のよい巨木が木陰をつくり，人々が憩う広場になっている。高さのあるロウ・ハウスやホテルとなっている建物も広場に面して建っているが，圧迫感を感じないのはやはりこの芝生の広さからくるのだろう。また，開園時間は7:00～22:00に決められている。 担当者　市島　侑里枝
14170㎡	憩いの広場	ロウ・ハウス C.フォックスの像 ヴィクトリアハウス（商業施設） 地下駐車場	資料001 資料017 資料003 資料018 資料004 資料019 資料006 資料021 資料007 資料031 資料008 資料032 資料009 資料033 資料010 資料101 資料011	ブルームズベリー・スクエアは，大英博物館をはじめとしてロンドン大学や周辺の美術館・博物館の集中するブルームズベリー地区に位置する。広場は17世紀後期にサウサンプトン伯爵によって開発され，サウサンプトン広場として知られていた。ロンドンの初期のガーデン・スクエアのひとつである。伯爵の家は，広場の北側にあった。広場の他の辺は，ロウ・ハウスが並び，当時上流階級の人々の住居が占めていた。現存する建物は，18・19世紀のものが多い。広場は2003年に改装され一般に開放された。調査時現在，7:30～21:00に開放されていて，管理機関の連絡先が記された看板が立っていた。昼休みには多くの人々のくつろぐ姿が見られた。 担当者　金子　友美
16557.1㎡	憩いの広場	ロウ・ハウス 舞台 大英博物館	資料001 資料017 資料003 資料018 資料004 資料019 資料006 資料021 資料007 資料031 資料008 資料032 資料009 資料033 資料010 資料101 資料011	ロンドンのブルームズベリー地区にある楕円形の広場。この地域は18世紀に上・中流階級の住宅地として計画された。この住宅地のプライベート・ガーデンとして広場がつくられ，現在も鍵を持った住民のみの利用に限られている。広場を取り囲む建築物は保存状態の良いジョージ王朝様式の建築物で，全ての住宅が統一されていたのが魅力的であった。どの建築物の玄関もアーチ状の窓がついており装飾が統一されていた。以前は住宅であったこれらの建築物は，現在では大部分がオフィスに改造されている。 担当者　土井　彩恵子
33997.1㎡	憩いの広場	アメリカ大使館 カナダ大使館 ロウ・ハウス フランクリン・ルーズヴェルトの像 アメリカ人パイロットの慰霊碑	資料001 資料017 資料003 資料018 資料004 資料019 資料006 資料021 資料007 資料031 資料008 資料032 資料009 資料033 資料010 資料101 資料011	グロヴナー家所有のメイフェアー地区にある広場で，広場の名前はその地主の名からつけられた。西側にはアメリカ大使館があり，現在はロンドンで最も整備された広場のひとつとなっている。調査時は夕方であったが，ベンチに座って本を読む人や，遊ぶ子供たちの姿が見られた。 担当者　西濱　芳子
1)+2)+3)+4)+5)+6)=13163.4㎡	市場広場 駐車場 商業広場 旧市庁舎前広場	商業施設 ギルドホール（旧市庁舎） POULTRY CROSS ジョン・アポート邸 ウィリアム・ラッセル邸 HENRY PAWCETTの像 地下公衆トイレ 記念碑	資料001 資料078 資料003 資料079 資料005 資料080 資料006 資料081 資料007 資料008 資料010 資料019 資料022	エイヴォン川の流れに囲まれたニュー・セーラムに町は位置し，その中心はこのマーケット・スクエアにある。マーケット・スクエアと川の間に13世紀創建のソールズベリ大聖堂がある。広場の南東の一画に18世紀後半のギルドホール（旧市庁舎）が建つ。1219年に市がこの場所で開かれ，1361年以来毎週火曜日と土曜日に行われている。市はオートミール・ロウやフィッシュ・ロウ，シルバー・ストリートといった周囲の通りにまで広がって開かれていた。 担当者　芦川　智
1)+2)=3052.3㎡	商業広場 通り広場	商業施設 HIGH STREET GATE (NORTH GATE) セント・トーマス教会 司教（カトリック）の館	資料001 資料078 資料003 資料079 資料005 資料080 資料006 資料081 資料007 資料008 資料010 資料019 資料022	オールド・ジョージの名称は古い宿屋の名前に由来する。1378年以来の名称であり，ハイ・ストリート側の入口にホテルのファサードがある。オリジナルは木造の建物である。NEW CANAL, CATHERINE STREET, NEW STREET, ハイ・ストリートの4本の通りに囲まれた街区を再開発してモールをつくり上げた。現代的な店が並ぶショッピング・モールとなっている。 担当者　芦川　智

CODE	国・都市・広場名称	広場形態	都市における広場の位置
GBR-05-07	国 : GREAT BRITAIN 都市: BATH 広場名称: ABBEY CHURCH YARD A		
GBR-05-08	国 : GREAT BRITAIN 都市: BATH 広場名称: 1) UNION STREET 2) STALL STREET B		
GBR-05-09	国 : GREAT BRITAIN 都市: BATH 広場名称: QUEEN SQUARE C		
GBR-05-10	国 : GREAT BRITAIN 都市: BATH 広場名称: THE CIRCUS D		
GBR-05-11	国 : GREAT BRITAIN 都市: BATH 広場名称: ROYAL CRESCENT E		
GBR-05-12	国 : GREAT BRITAIN 都市: GLOUCESTER 広場名称: 1) WESTGATE STREET 2) EASTGATE STREET 3) SOUTHGATE STREET 4) NORTHGATE STREET 5) COLLEGE STREET 6) THE CROSS (HIGH CROSS)		

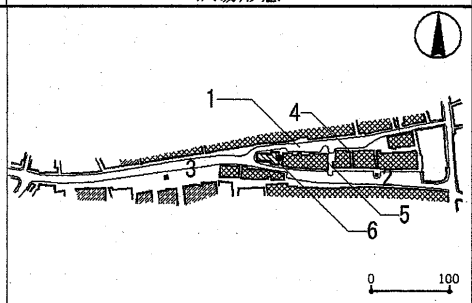
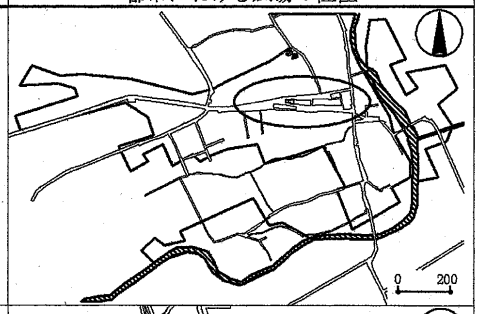
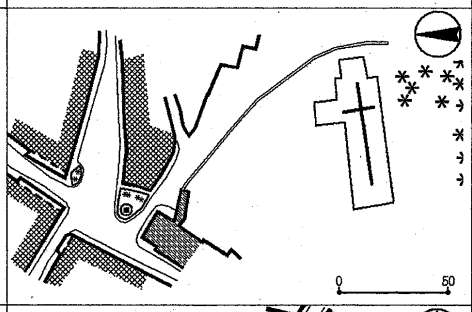
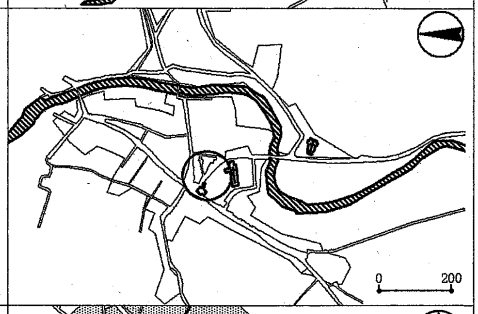
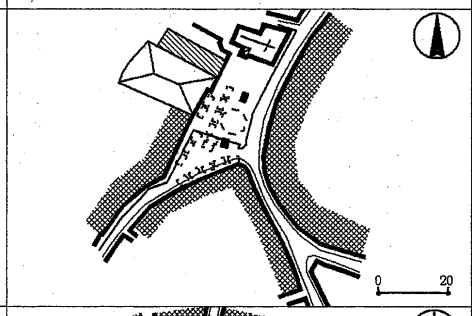
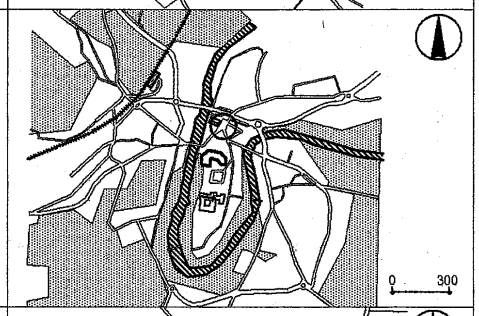
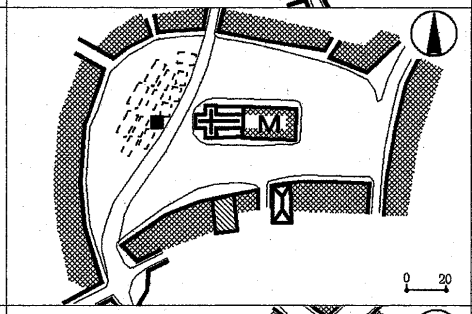
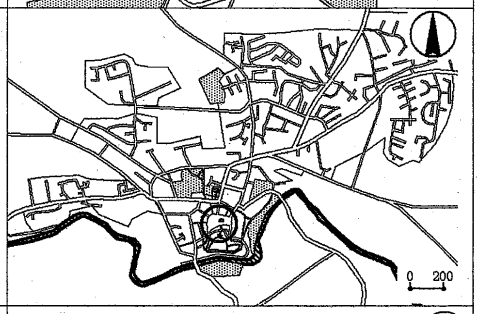
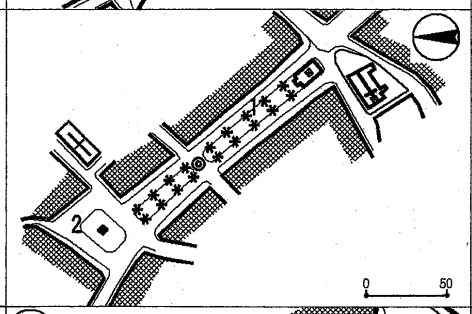
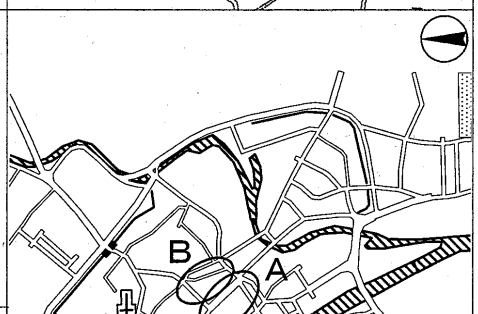
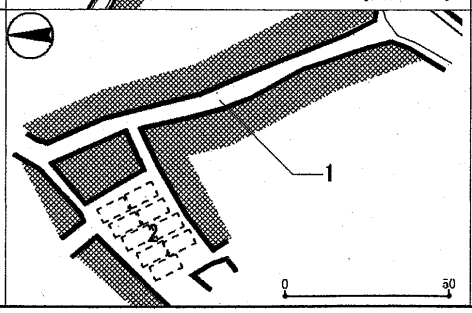
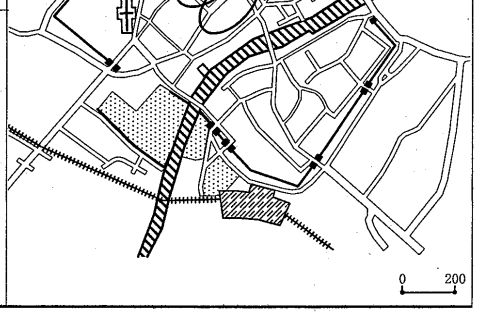
規模	広場機能	周辺建築物	資料	都市および広場の概要
3492.7㎡	教会前広場 憩いの広場 遺跡（博物館）前広場	ローマ浴場遺跡（博物館） バース寺院 ギルドホール ポンプ・ルーム（鉱泉水飲み場） サリー・ランの家博物館 商業施設	資料001　資料021 資料003　資料022 資料005　資料024 資料006　資料034 資料007　資料035 資料008 資料010 資料019 資料020	ローマ時代の温泉地として知られた当地の中心地域には，ローマ時代の浴場遺跡が位置する。18世紀には上流階級の保養地として栄えた。バース寺院のある広場を中心として，浴場遺跡から市庁舎，ギルドホール，市場施設，ポンプ・ルーム（社交センター），商業施設が並ぶ。北側には市庁舎前のメインストリートであるハイ・ストリートが位置し，西側には現在の中心であるユニオン・ストリートが位置している。 担当者　芦川　智
1)+2)=3495.2㎡	商業広場 通り広場 憩いの広場	商業施設 ポンプ・ルーム UNION PASSAGE THE CORRIDOR NORTHUMBERLAND PLACE 王立ミネラル・ウォーター病院	資料001　資料021 資料003　資料022 資料005　資料024 資料006　資料034 資料007　資料035 資料008 資料010 資料019 資料020	バースの中心街は以前は市庁舎の位置するハイ・ストリートにあったと予想されるが，この道は現在車道が主となっており，その結果，歩行者空間としてメインストリートはユニオン・ストリート側に移っている。商業施設の集積も成されており，ユニオン・ストリートから延びる幾つかの細い道の空間にも商店が並んでいた。これらの小道には，狭い通路を意味するPASSAGEといった名前がつけられていた。 担当者　芦川　智
9128.5㎡	憩いの広場	バース王立文芸科学協会 バース・アカデミー オベリスク 商業施設 ジェーン・オースティン・センター	資料001　資料021 資料003　資料022 資料005　資料024 資料006　資料034 資料007　資料035 資料008 資料010 資料019 資料020	ジョージ王朝時代につくられた広場で，中央は公園的設えとなっている。設計はジョン・ウッド。広場を囲む建物は，ドライ・エリアのある連続住居の形式である。北側には，パラーディオ様式のファサードをもつ建物があるが，その内側は7つの家から成る。現在その一部には私立学校が入っている。他の建物も現在ではホテルや保険会社などのオフィスに使われているものが多い。 担当者　芦川　智
7412,4㎡	憩いの広場	ロウ・ハウス ジョージアン・ガーデン（庭園） 東アジア芸術博物館	資料001　資料021 資料003　資料022 資料005　資料024 資料006　資料034 資料007　資料035 資料008 資料010 資料019 資料020	クイーン・スクエアに続いて，ジョン・ウッドによって設計された広場とそれを囲む集合住宅が配置された円形の広場。周囲を囲む住宅は画家トーマス・ゲインズバラ，クライブ・オブ・インディア，探検家デイビット・リビングストンの住居であったことを示す表示が記されている。 担当者　芦川　智
32043.2㎡	憩いの広場	駐車場 プライベート・ガーデン ロイヤル・ヴィクトリア・パーク ナンバーワン・ロイヤル・クレセント（博物館）	資料001　資料021 資料003　資料022 資料005　資料024 資料006　資料034 資料007　資料035 資料008 資料010 資料019 資料020	ジョン・ウッド・ザ・ヤンガー設計の広場と三日月型の集合住宅。ジョージ王朝時代の様式の建築。1767～1774年にかけて建てられた。南側は私有地の芝生地があり，ロイヤル・ヴィクトリア・パークへと続く。さらにロイヤル・アベニューが通り，クイーン・スクエアに通じている。 担当者　芦川　智
1)+2)+3)+4)+5)+6)=13960.8㎡	通り広場 市場広場 旧教会前広場 博物館前広場	グロスター大聖堂 セント・ミカエルズ・タワー 州立ホール 市立博物館・美術館（ギルドホール） イーストゲート・マーケット 彫刻 商業施設 セント・メリー地下聖堂	資料001　資料099 資料003 資料006 資料007 資料019 資料062 資料063 資料064 資料098	イングランド西部グロスター州にある工業都市で，グロスター州都である。都市の名前は古ウェールズ語の「輝く gloiu」と古英語の「城壁 ceaster」の合成語に由来する。かつて町を囲んでいた東西南北4つの城門から延びる4本の通りの交点がザ・クロス，町の中心である。南角にあるセント・ミカエルズ・タワーは，以前そこにあったセント・ミカエルズ教会の一部である。12～16世紀には，4本の通りのうちノースゲート・ストリートを除く3本の通り中央部に市場や宗教施設，井戸などが設けられていた。現在，ザ・クロス周辺は歩行者空間として整備され，ベンチや彫刻が置かれている。そして毎週金曜日には農作物市が開かれる。 担当者　金子　友美

CODE	国・都市・広場名称	広場形態	都市における広場の位置
GBR-05-13	国 : GREAT BRITAIN 都市: BROADWAY 広場名称: 1)HIGH STREET 2)THE GREEN		
GBR-05-14	国 : GREAT BRITAIN 都市: CHIPPING CAMPDEN 広場名称: 1)HIGH STREET 2)LOWER HIGH STREET		
GBR-05-15	国 : GREAT BRITAIN A 都市: CHESTER 広場名称: 1)TOWN HALL SQUARE(旧MARKET SQUARE) 2)ST.WERBURGH STREET		
GBR-05-16	国 : GREAT BRITAIN B 都市: CHESTER 広場名称: 1)EASTGATE STREET 2)WATERGATE STREET 3)NORTHGATE STREET (旧デクマナ通り) 4)BRIDGE STREET (旧プラエトリア通り) 5)THE CROSS		
GBR-05-17	国 : GREAT BRITAIN 都市: LIVERPOOL 広場名称: WILLIAMSON SQUARE		
GBR-05-18	国 : GREAT BRITAIN 都市: CARLISLE 広場名称: 1)GREEN MARKET(MARKET PLACE) 2)ENGLISH STREET		

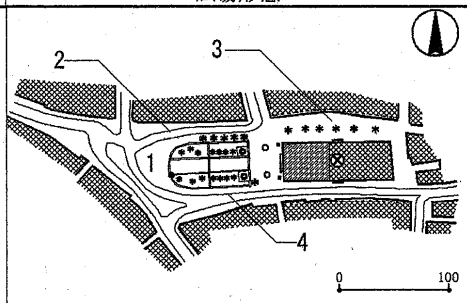
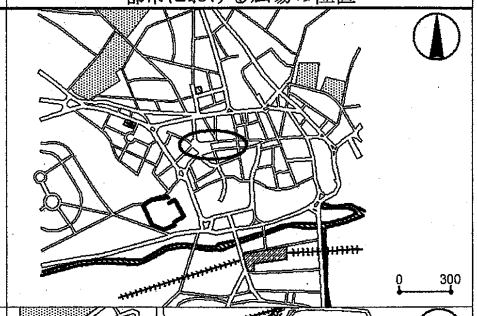
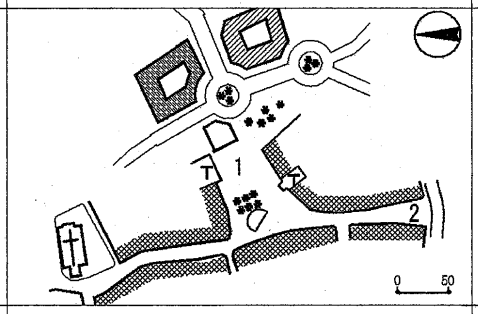
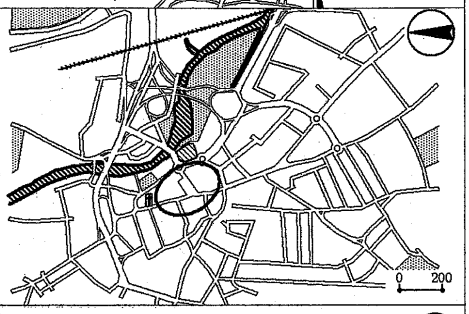
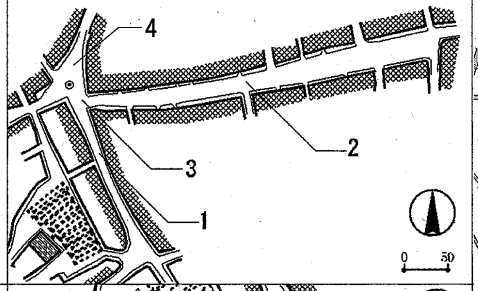
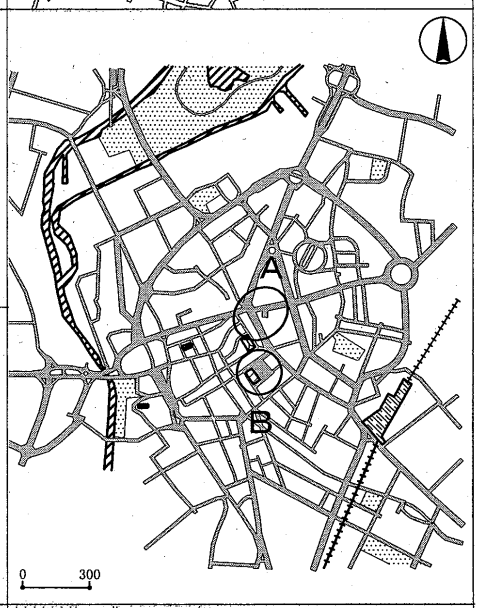
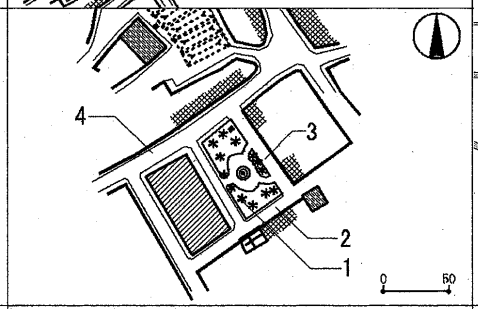
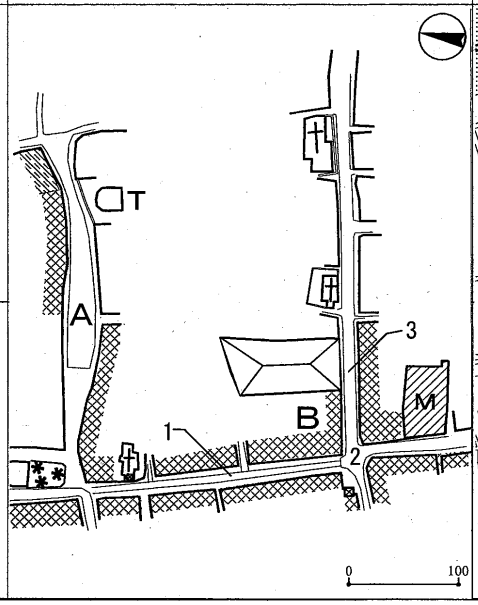
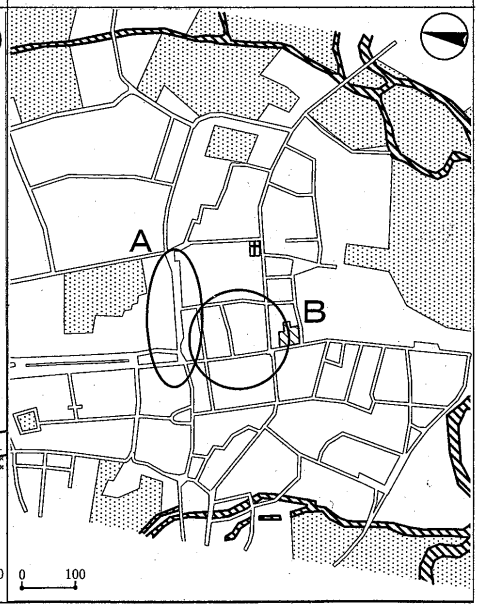
規模	広場機能	周辺建築物	資料	都市および広場の概要
1)+2)=8943.9㎡	市場広場 通り広場 憩いの広場	旧郵便局 商業施設 メモリアル・クロス	資料001 資料003 資料007 資料008 資料010 資料020 資料036 資料037 資料098	ブロードウェイは最も美しいイギリスの町のひとつとして長い間知られている。500年前，この町は羊毛の商人で繁栄した。羊の群れが一団となって通れるほど広いという意味からブロードウェイと名づけられたように，ハイ・ストリートは広い。両側には黄色いコッツウォルド・ストーンで建てられた家並みが続いている。これらの建物は16～17世紀に建てられたものも多い。市は月末の火曜の朝だけ行われる。また，通り沿いに駐車スペースが設けられていた。 担当者　西濱　芳子
1)+2)=6109.8㎡	通り広場 旧市庁舎前広場 旧市場広場 駐車場	旧市場施設 旧市庁舎 図書館 郵便局 商業施設 クロス（戦争の記念碑） バプテスト教会 ST. CATHARINES RC CHURCH ST. CATHARINES RC PRIMARY SCHOOL バス停留所	資料001 資料003 資料007 資料008 資料010 資料015 資料045 資料098	「この島国に残された最も美しい村の道」と歴史家トレヴェリアンがいった魅力的なハイ・ストリートをもつコッツウォルズ北部の町。13～14世紀から市が立ち，ウール・タウンとして栄えた。ハイ・ストリート全体が1970年2月保護地域に指定された。町の中心部にある市場施設は1627年に地域の農産物市場として建設され，現在はナショナル・トラストによって修復保存され，木造の小屋組を見ることができる。 担当者　西濱　芳子
1)+2)=5516.8㎡	市庁舎前広場 通り広場 市場広場 教会（大聖堂）前広場	市庁舎 チェスター大聖堂 IRONMONGERS' ROW BROKEN SHIN ROW 古代ローマの円柱（遺跡） 城壁（遺跡） ST. NICHOLAS'S CHAPEL（旧音楽ホール） 商業施設	資料001　資料022 資料003　資料025 資料006　資料042 資料007　資料043 資料008　資料044 資料010　資料091 資料019 資料020 資料021	チェスターはイングランド中央西部，チェシャー西部にある歴史的都市で，州都である。ローマ時代にはデクマナ通りと呼ばれていたノースゲート・ストリートは昔，城門付近で動物市，現市庁舎前の広場では別の市が開かれるなど商業で賑わう通りであった。現在でも毎朝，市庁舎前で市が開かれる。なお，広場の入口にはゲートが設けられ，町の中心部への進入車両が規制されていた。チェスター大聖堂は，ノースゲート・ストリートの東側に位置する。10世紀の創建だが，以後増改築が繰り返され様々な様式の混在した建物となっている。最近では映画ハリー・ポッターの撮影にも使われた。 担当者　金子　友美
1)+2)+3)+4)+5)=7470.4㎡	通り広場 商業広場	チェスター・クロス ロウ（6） ギルドホール イーストゲート・クロック セント・マイケルズ・ビルディングズ ST. PETER'S CHURCHYARD KING'S FISHBOARDS ビショップ・ロイズ・ハウス 歴史的建築物の家（多数） ダッチ・ハウジズ キングズ・ハウス 商業施設	資料001　資料022 資料003　資料025 資料006　資料042 資料007　資料043 資料008　資料044 資料010　資料091 資料019 資料020 資料021	チェスターの町は，ローマ都市の直交する街路形態を基盤としている。4本の主要な通りの交点はザ・クロスと呼ばれ町の中心である。このザ・クロス周辺は，ザ・ロウズと呼ばれる2階建てアーケードの建物が続く。このザ・ロウズの起源には，遺跡保護のため，あるいは地質の問題で地下室を作ることができなかったなどいくつかの説があるが，いずれも定かではない。これらの建物の多くはハーフティンバー様式のファサードをもち，統一感のある町並みとなっている。天候に影響されない快適な歩行者空間である。 担当者　金子　友美
3748.5㎡	劇場前広場 憩いの広場 商業広場	リバプール・プレイハウス（劇場） コンベンション・センター 商業施設 露店 噴水	資料001　資料022 資料003 資料006 資料007 資料008 資料010 資料016 資料019 資料020	リバプールは，イングランド北西部，マージーサイド州の州都で，港湾・工業都市である。ロンドンに次ぐ，イギリス第二の貿易港でもある。現在は都市の再開発が進んでいる。複数の噴出口が地面に直接埋め込まれた噴水など，広場も現代的なデザインで人々の憩いの空間として整えられていた。 担当者　鴨居　朋子
1)+2)=9121.5㎡	旧市庁舎前広場 博物館前広場 市場広場	旧市庁舎 ギルドホール博物館 カーライル・クロス（マーケット・クロス） JAMES STEEL MAYOR 像 舞台 商業施設 VICTORIAN POST BOX カーライル大聖堂 記念碑	資料001 資料006 資料007 資料008 資料019 資料022 資料024 資料040 資料041	カーライルはイングランド北部カンブリア州都であり，スコットランドとの境界線に位置するため古くからBORDER CITYと呼ばれていた。ハドリアヌスの城壁の最西端に位置する。町の名は，ケルト人の砦カエール（CAER）に由来する。グリーン・マーケットはマーケット・プレイスとも呼ばれ，旧市街の中心に位置する。現在でも毎月第1金曜日に農産物の市が開かれる。広場を囲む建物には，旧市庁舎やギルドホールなど歴史を感じさせるものも多い。また広場は車両の進入が規制されており，歩行者空間となっている。 担当者　金子　友美

CODE	国・都市・広場名称	広場形態	都市における広場の位置
GBR-05-19	国 ： GREAT BRITAIN 都市: GLASGOW 広場名称: GEORGE SQUARE A		
GBR-05-20	国 ： GREAT BRITAIN 都市: GLASGOW 広場名称: 1) BUCHANAN STREET 2) ROYAL EXCHANGE SQUARE 3) ROYAL BANK PLACE 4) SOUTH EXCHANGE PLACE B		
GBR-05-21	国 ： GREAT BRITAIN 都市: STIRLING 広場名称: BROAD STREET (MERCAT STREET)		
GBR-05-22	国 ： GREAT BRITAIN 都市: CULROSS 広場名称: MERCAT CROSS A		
GBR-05-23	国 ： GREAT BRITAIN 都市: CULROSS 広場名称: SANDHAVEN B		
GBR-05-24	国 ： GREAT BRITAIN 都市: EDINBURGH 広場名称: 1) HIGH STREET 2) LAWNMARKET 3) PARLIAMENT SQUARE		

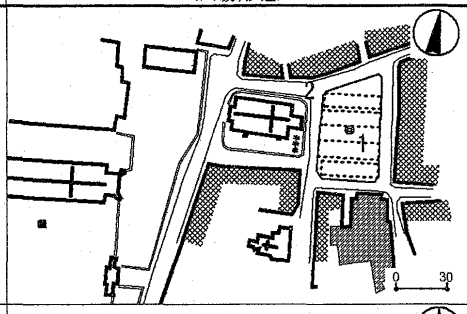
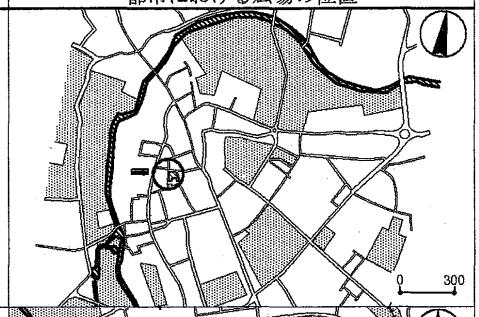
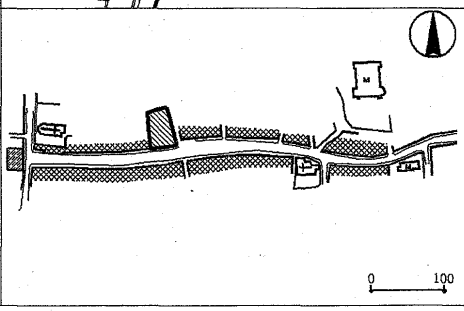
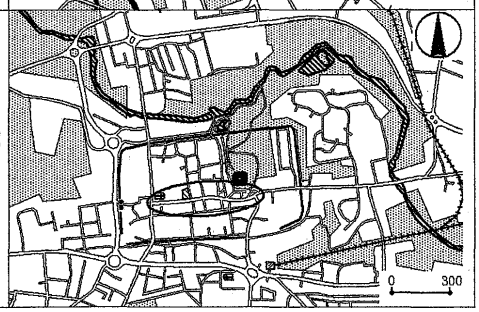
規模	広場機能	周辺建築物	資料	都市および広場の概要
10683.9㎡	市庁舎前広場 駐車場 記念広場	市庁舎，市議会議事堂 郵便局 商業施設 像（12） 戦没者記念碑 QUEEN STREET 駅 仮設テント	資料001　資料020 資料002　資料022 資料006　資料023 資料007　資料091 資料008　資料095 資料010　資料096 資料012　資料097 資料018　資料101 資料019	ストラスクライド州の州都で，スコットランド南西部に位置するスコットランド最大の町である。人口は約57万8000人（2001年）。地名は「緑の峡谷」を意味するケルト語 gleschu が語源となっている。広場には，市庁舎，郵便局等のヴィクトリア朝様式の建物が並び，ジェームズ・ワット，ウォルター・スコット等の著名人の像が計12体点在する。調査時には，9月9，10日に開かれるウイスキーの祭りのための，巨大なテントが設置されていた。定期市は，町の南東にあるTHE BARRAS で土曜と日曜に開かれる。 担当者　高木　亜紀子
1)+2)+3)+4)=11770.4㎡	通り広場 博物館周囲広場	現代美術館 商業施設	資料001　資料020 資料002　資料022 資料006　資料023 資料007　資料091 資料008　資料095 資料010　資料096 資料012　資料097 資料018　資料101 資料019	グラスゴーは，タバコ，ウイスキー醸造，繊維工業，造船業，石炭及び鉄鋼業の中心として繁栄した産業都市であり，また，近年はヨーロッパ文化都市，イギリス建築・デザイン都市に指定されるなど，文化・芸術の町でもある。この BUCHANAN STREET は，北側から続く SAUCHIEHALL STREET とともに歩行者専用空間を形成し，ジョージ・スクエアと同様に町の中心となっている。ROYAL EXCHANGE SQUARE にある建物はかつては商取引を行う王立取引所（ROYAL EXCHANGE）であった。現在は現代美術館となっており，現代絵画，陶磁器，彫刻が展示されている。 担当者　高木　亜紀子
4441.7㎡	通り広場 教会横広場 旧市場広場 旧市庁舎前広場 駐車場	ホリー・ルード教会 マーカト・クロス 商業施設 旧市庁舎 大砲の記念碑	資料001　資料019 資料002　資料020 資料003　資料022 資料007　資料082 資料008　資料083 資料010　資料084 資料012 資料015 資料018	かつて「スターリングを制する者，国を制す」と言われ，スコットランドの命運をかけた戦いが町の周辺で何世紀にもわたり繰り広げられてきた。英雄ウィリアム・ウォレスが戦いの勝利を収めた地としても有名である。城郭の残る古都で，その中世の面影を残した風情ある町並みから「ミニチュア版エジンバラ」とも呼ばれている。ブロード・ストリートにはマーカト・クロスが建っており，かつては市場広場として栄えていたが，現在はショッピングセンターが町の中心となっており市は開かれていない。また，ブロード・ストリートには大砲の記念碑も置いてあり，かつて戦場の地であった名残がうかがえる。 担当者　市島　侑里枝
375.2㎡	市場広場	マーカト・クロス 商業施設	資料002 資料047	クルロスは，スコットランド，ファイフ州の自治都市で，5世紀に聖サーフによって創設された。6世紀頃には重要な宗教の中心地となり，修道士，聖マンゴーの生まれた地でもある。聖マンゴーは，同じくスコットランドのグラスゴーとも関わっていて，彼はグラスゴー大聖堂に眠っている。町には赤い桟瓦の屋根の小さな家々が並ぶ。1930年から，スコットランドのナショナル・トラストが，この町の修繕と維持に取り組み始めた。 担当者　野村　麻美
2960.7㎡	市庁舎前広場 憩いの広場	市庁舎 THE TRON（量りの記念碑） 公園 ジョージ・ブルース卿生家 バス停留所	資料002 資料047	町は，16～17世紀にかけて石炭や塩などの貿易が盛んであった。フォース湾に面するこの広場には，当時計量するために使われていた天秤の名残が，今でも残っている。広場に面して建つ市庁舎は，1626年に建てられた。 担当者　野村　麻美
1)+2)+3)=8238㎡	通り広場 教会（大聖堂）周囲広場 市庁舎前広場 旧市場広場	セント・ジャイルズ大聖堂 市庁舎 スコットランド国立図書館 最高裁判所（旧議事堂） 裁判所（2） マーカト・クロス 井戸 HUME 像 CAROLD SECONDO 像 DOUGLAS SCOTT 像 商業施設	資料001　資料018 資料002　資料019 資料003　資料022 資料006　資料023 資料007　資料054 資料008　資料055 資料010　資料056 資料012　資料057 資料017　資料058	スコットランド王国のかつての首都。町のほぼ中央のプリンシズ通りを境として，北側が新市街，南側が旧市街となっている。旧市街の中心はエジンバラ城からホリールードハウス宮殿に至る，約1マイルのロイヤル・マイルと呼ばれる通りである。通りの両側にはクロウス（袋小路）やワインド（小路）がいくつも配置されている。中央は車が通り，駐車スペースも設けられている。LAWNMARKET，ハイ・ストリートもロイヤル・マイルの一部である。LAWNMARKET は中世には市が開かれていた場所で，乳製品，肉，亜麻布，毛織物などが売られていた。パーラメント・スクエアは古くからのエジンバラの政治・法律・宗教の中心地であった。 担当者　市島　侑里枝

CODE	国・都市・広場名称	広場形態	都市における広場の位置
GBR-05-25	国 : GREAT BRITAIN 都市: HADDINGTON 広場名称: 1)MARKET STREET 2)HIGH STREET 3)COURT STREET 4)BRITANNIA WYND 5)BROAD WYND 6)JAIL WYND		
GBR-05-26	国 : GREAT BRITAIN 都市: JEDBURGH 広場名称: MARKET PLACE(旧COWER CROSS)		
GBR-05-27	国 : GREAT BRITAIN 都市: DURHAM 広場名称: MARKET PLACE		
GBR-05-28	国 : GREAT BRITAIN 都市: RICHMOND 広場名称: TRINITY CHURCH SQUARE(MARKET PLACE)		
GBR-05-29	国 : GREAT BRITAIN A 都市: YORK 広場名称: 1)PARLIAMENT STREET 2)ST. SAMPSON'S SQUARE		
GBR-05-30	国 : GREAT BRITAIN B 都市: YORK 広場名称: 1)SHAMBLES 2)OPEN AIR MARKET		

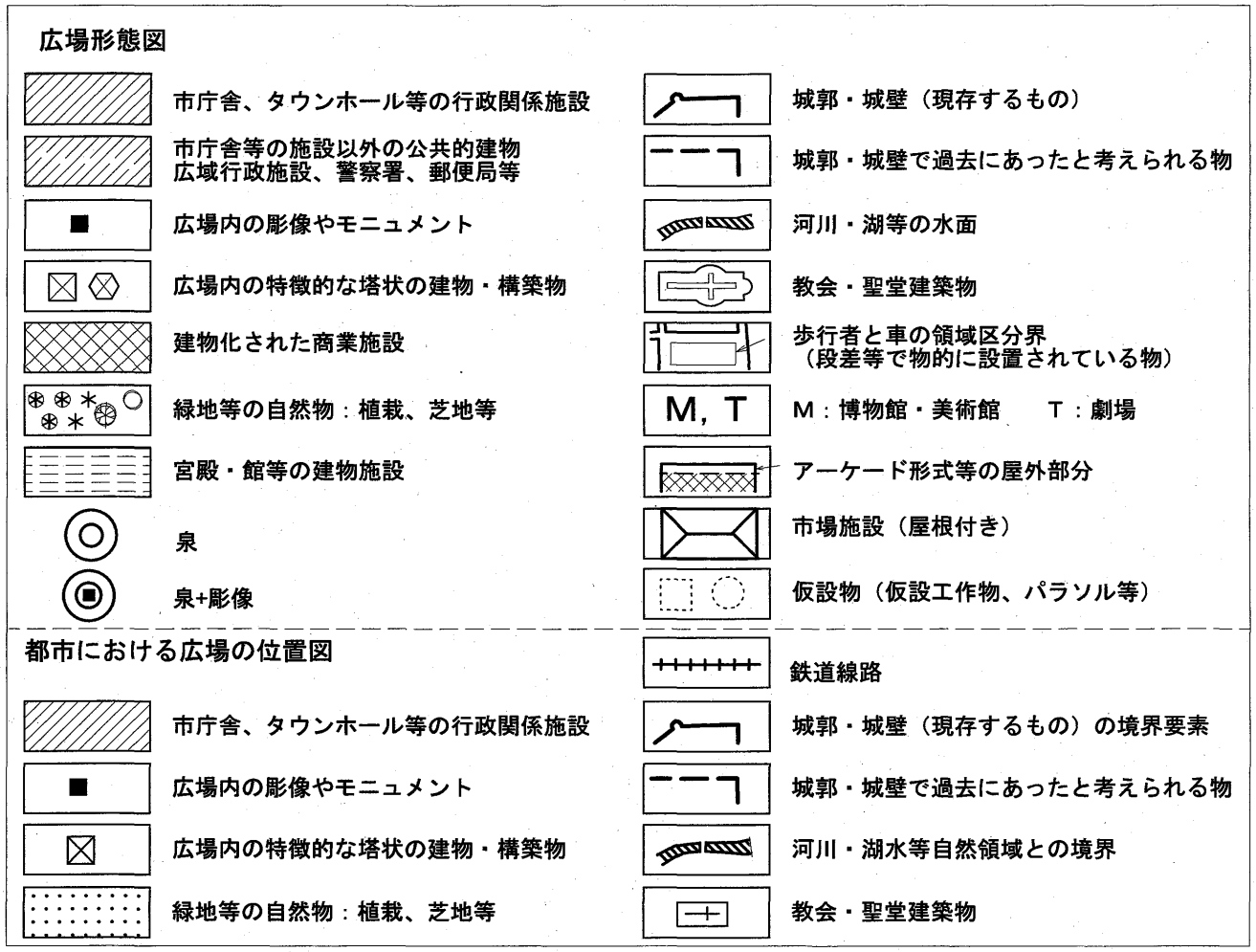
規模	広場機能	周辺建築物	資料	都市および広場の概要
1)+2)+3)+4)+5)+6)=16252.9㎡	市庁舎前広場 通り広場 駐車場 市場広場	市庁舎 郵便局 警察署 噴水 GEORGE 8 世侯爵の像 マーカト・クロス 穀物取引所 議事堂 バス停留所 商業施設	資料002 資料065 資料097	人口約 8000 人。中世からの市場町であり，かつてはCOURT STREET，マーケット・ストリート，ハイ・ストリートで市が立っていた。3 つの通りの交差部には，1748 年建造の市庁舎がある。18 世紀の農業による繁栄を示す建物である。現在，マーケット・ストリート，ハイ・ストリートの大部分は車道と駐車スペースとなっている。COURT STREET の噴水と像のある周辺は歩行者空間となっており，そこでは月 1 回土曜日に農作物の市が開かれる。 担当者　高木　亜紀子
2573.7㎡	旧市場広場 駐車場	裁判所 刑務所 マーカト・クロス 商業施設	資料001 資料002 資料003 資料007 資料066	人口約 4100 人のスコットランド南部の小都市。古い町並みが残され，クロウスやワインドが多数配置されている。広場は 5 つの道が集まる町の中心であり，かつて市が開かれていたことを示すマーカト・クロスが建っている。また，そこから数メートル離れた場所には，マーカト・クロスが最初に建てられた位置を表す飾り板が埋まっている。現在の広場で歩行者空間として整備されているのは，マーカト・クロス周辺のわずかな部分のみであり，車道や駐車スペースが大部分を占める。広場の約 150 m 南側には，1138 年にデイビッド 1 世によって建てられたジェドバラ大修道院がある。現在は廃墟となっているが，内部は一般公開されている。 担当者　西濱　芳子
744.9㎡	教会前広場 市場広場 市庁舎前広場	市庁舎 セント・ニコラス教会 商業施設 市場施設 ネプチューンの像 チャールズ・ウィリアム・ベイン・スチュワートの馬上の銅像 記念碑，井戸跡 露店	資料001　資料051 資料003　資料052 資料007　資料053 資料008　資料074 資料010 資料016 資料019 資料024 資料026	イングランド北部，スコットランドとの国境近くにあるダラムは，大きく蛇行するウィアー川に囲まれた町である。北方の侵略から町を守ってきたノルマン様式の傑作といわれる堅固な城と大聖堂が小高い丘の上にそびえ建ち，町の至る所に中世の面影が残る。町の中心であるマーケット・プレイスでは，800 年以上前から市が開かれている。現在も毎週土曜日に市が開かれ，露店が並び，多くの人々で賑わいをみせる。また，広場に面する市場施設は日曜以外の週 6 日営業しており，食料品，衣類，家具などが売られる活気ある市場であった。 担当者　土井　彩恵子
12168.8㎡	市場広場 市庁舎前広場 教会，博物館周囲広場 駐車場	市庁舎（含旧裁判所） トリニティ教会，グリーン・ハワーズ博物館 商業施設 オベリスク（旧マーケット・クロス） 露店 リッチモンド城 市場施設 公衆トイレ	資料003 資料007 資料019 資料074 資料075 資料076 資料077 資料090	ローマ時代以降に造られた石城としては英国最古といわれているリッチモンド城の城下に広がるトリニティ教会広場を中心に，放射線状に町が広がっている。玉石を敷いた通りや路地，ジョージ王朝時代の建物や石造りの別荘が今なお保存されている。広場の中心にはトリニティ教会が建ち，周囲を商業施設が取り囲む。イングランド最大といわれる市場広場は，現在は大部分が駐車スペースとなっているが，毎週土曜日には市が開かれる。教会の西側に建つ巨大なオベリスクは，もともとマーケット・クロスであったが，1771 年に建て替えられたものである。 担当者　土井　彩恵子
1)+2)=7271.3㎡	教会前広場 憩いの広場 商業広場 通り広場	ALL SAINTS 教会 ST. SAMPSON'S 教会 噴水 商業施設 露店 公衆トイレ	資料001　資料018 資料003　資料019 資料006　資料022 資料007　資料085 資料008　資料086 資料010　資料087 資料015　資料088 資料016　資料089 資料017　資料090	ヨークは 2000 年の長きにわたり，ローマ，サクソン，デーン，ノルマンと多くの民族の争いと交流を見続けてきた，歴史的都市である。戦略的に重要な位置にあったため，侵略による破壊と再建を繰り返し，要塞都市として，また，宗教的にも重要な町となった。今日でも，その文化的，建築的に価値のある遺産を残している。この広場と通りはショッピングや待ち合わせをする多くの市民で賑わう町の中心である。野外演奏会，商品のキャンペーンなども行われていた。 担当者　鴨居　朋子
1)+2)=1522.2㎡	通り広場 商業広場 市場広場	商業施設 市場施設	資料001　資料018 資料003　資料019 資料006　資料022 資料007　資料085 資料008　資料086 資料010　資料087 資料015　資料088 資料016　資料090 資料017	ヨークで最も有名な通りであり，何百年にもわたって，肉屋や屠殺屋が集まる通りとなっていた。現在も中世の木骨造りの建物が残っている。上の階にいくほど軒が前に突き出しているが，これは，日当たりを悪くして，軒下に吊るした肉を長持ちさせるための造りである。現在は美術品や工芸品等を売る店が並ぶ，ヨークの観光スポットとなっている。また，通りの西側には市場広場があり鉄骨の枠組みの市場施設が並び，賑わいをみせている。 担当者　鴨居　朋子

CODE	国・都市・広場名称	広場形態	都市における広場の位置
GBR-05-31	国 : GREAT BRITAIN 都市: NOTTINGHAM 広場名称: 1)MARKET SQUARE 2)LONG ROW 3)SMITHY ROW 4)SOUTH PARADE		
GBR-05-32	国 : GREAT BRITAIN 都市: DERBY 広場名称: 1)MARKET PLACE 2)CORNMARKET		
GBR-05-33	国 : GREAT BRITAIN A 都市: LEICESTER 広場名称: 1)GALLOWTREE GATE 2)HUMBERSTONE GATE 3)EAST GATES 4)HAYMARKET		
GBR-05-34	国 : GREAT BRITAIN B 都市: LEICESTER 広場名称: 1)MUNICIPAL SQUARE WEST 2)BISHOP STREET 3)EVERY STREET 4)HORSEFAIR STREET		
GBR-05-35	国 : GREAT BRITAIN A 都市: OXFORD 広場名称: BROAD STREET		
GBR-05-36	国 : GREAT BRITAIN B 都市: OXFORD 広場名称: 1)CORNMARKET STREET 2)CARFAX 3)HIGH STREET (THE HIGH)		

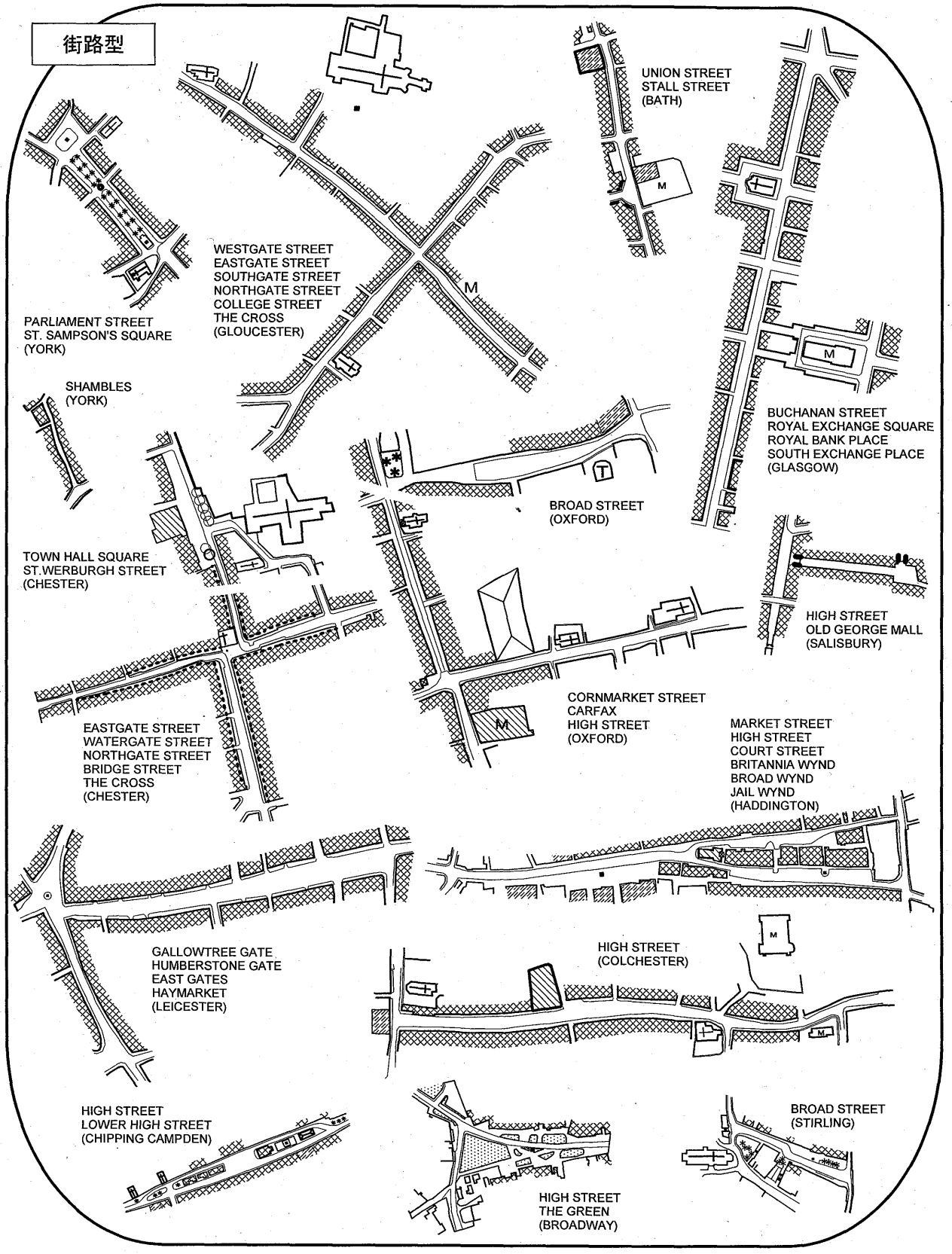
規模	広場機能	周辺建築物	資料	都市および広場の概要
1)+2)+3)+4)=18502.9㎡	旧市場広場 憩いの広場	商業施設 路面電車停留所 議事堂 噴水（2） バス停留所	資料001　資料069 資料003　資料102 資料007 資料008 資料010 資料018 資料019 資料022 資料068	ノッティンガムは，ペナイン山脈の南東麓，トレント川北岸に位置する。水上及び鉄道・交通の要衝であり，メリヤス，レース，皮革工業が発達した。ロビンフッドの生地としても有名であり，城周りではロビンフッド・フェスティバルが10月に開かれている。中世の建造物など歴史的な町並みが残っている。かつてはこの広場で大規模な市が立ち，町の中心地として賑わっていたが，広場が改装された4年前から市は開かれなくなった。現在の広場は，路面電車利用者以外には人はなく，閑散としている。 担当者　土井　彩恵子
1)+2)=6275.5㎡	市場広場 市庁舎前広場 劇場前広場	劇場（旧ギルドホール，旧市庁舎） 多目的ホール 市庁舎 裁判所 戦争慰霊碑 記念碑 SIR PETER HILTON 公園 商業施設	資料001 資料003 資料019 資料048 資料049 資料092 資料093 資料094	イングランド中央部，ダービー州にあるこの地域の行政の中心地。車両，自動車，エンジン，化学繊維などの工業都市で，ロールスロイスで有名である。この広場は中世初期から地域社会の成長に不可欠な存在であり，世紀を越え町の経済と社会との両方の中心地であった。現在は月に一度 FARMERS' MARKET と CONTINENTAL MARKET という市が開かれ，また，最近では9月に ECO-FESTIVAL というイベントが開かれる場所でもある。 担当者　野村　麻美
1)+2)+3)+4)=17764.7㎡	通り広場 商業広場	商業施設 時計塔 HAYMARKET CENTRE THE SHIRES CENTRE	資料001 資料003 資料006 資料007 資料025 資料091 資料100	中世から20世紀半ばまで，靴下製造が主な財源であった。第二次世界大戦では空襲にあったが，戦後復興を遂げ，様々な人が集まる国際的な町に生まれ変わり，多文化主義の町となった。大規模なアジア人コミュニティーがあり，ヨーロッパ唯一のジャイナ教寺院の他，イスラム教，ヒンドゥー教，シーク教の寺院もある。時計塔を中心に5つの通りが延びており，西へ向かう HUMBERSTONE GATE，南へ向かう GALLOWTREE GATE は歩行者空間となっている。巨大なショッピングモール，商業施設が連なる町の中心である。沢山の人であふれ，賑わいをみせていた。 担当者　高木　亜紀子
1)+2)+3)+4)=5543.1㎡	市庁舎前広場 憩いの広場 教会横広場 旧市場広場	市庁舎 郵便局 METHODIST 教会 ボーマ戦争記念碑 商業施設 噴水	資料001 資料003 資料006 資料007 資料025 資料091 資料100	メインストリートから一本入った場所に位置するこの広場は，街の喧騒から切り離された静かな空間である。植栽や噴水が整備され，ベンチに座りくつろぐ人々の姿が見られた。また，自転車，スケートボードの進入が禁止されている。広場に面する市庁舎は，1792年に JOHN JOHNSON によって建てられた。かつては祭りや市が開かれていた。1774年からは水曜に家畜市が開かれていた。 担当者　高木　亜紀子
7691.2㎡	通り広場 劇場前広場 駐車場	BALLIOL COLLEGE EXETER COLLEGE シェルドニアン劇場 図書館 商業施設	資料001　資料071 資料003　資料072 資料006　資料073 資料008 資料010 資料015 資料019 資料022 資料070	世界屈指の学問の町で，テムズ川とチェーウェル川の合流する緩やかな丘陵地帯に広がる。傍らに牛の渡渉点があったことから OXFORD という名前がついた。ブロード・ストリートは，もともとは町を囲む城壁の外の濠であったが，羊毛取引で栄えた時代には町の中心地であった。現在は多くの本屋が軒を連ねる。 担当者　野村　麻美
1)+2)+3)=7858㎡	通り広場 商業広場 市場広場 教会前広場	カーファックス・タワー 市場施設 セント・マイケル教会 セント・メアリー教会 BRASENOSE COLLEGE LINCOLN COLLEGE ORIEL COLLEGE UNIVERSITY CHURCH 商業施設	資料001　資料071 資料003　資料072 資料006　資料073 資料008 資料010 資料015 資料019 資料022 資料070	カーファックス周辺が町の中心となっている。カーファックスの名はラテン語で四つ辻を意味する quadrifurcus に由来する。サクソン時代から町の中心であった。このカーファックス・タワーは1896年に取り壊されたセント・マーティン教会の塔である。内部は一般公開されている。この周辺では中世の頃から露天市が開かれていたが，不衛生かつ悪臭を漂わせていたため，1774年にハイ・ストリート沿いの市場施設に移転した。 担当者　野村　麻美

CODE	国・都市・広場名称	広場形態	都市における広場の位置
GBR-05-37	国 ： GREAT BRITAIN 都市: CAMBRIDGE 広場名称: 1)MARKET HILL(THE CHIEF MARKET) 2)MARKET STREET(SHOT MAKER LANE)		
GBR-05-38	国 ： GREAT BRITAIN 都市: COLCHESTER 広場名称: HIGH STREET		

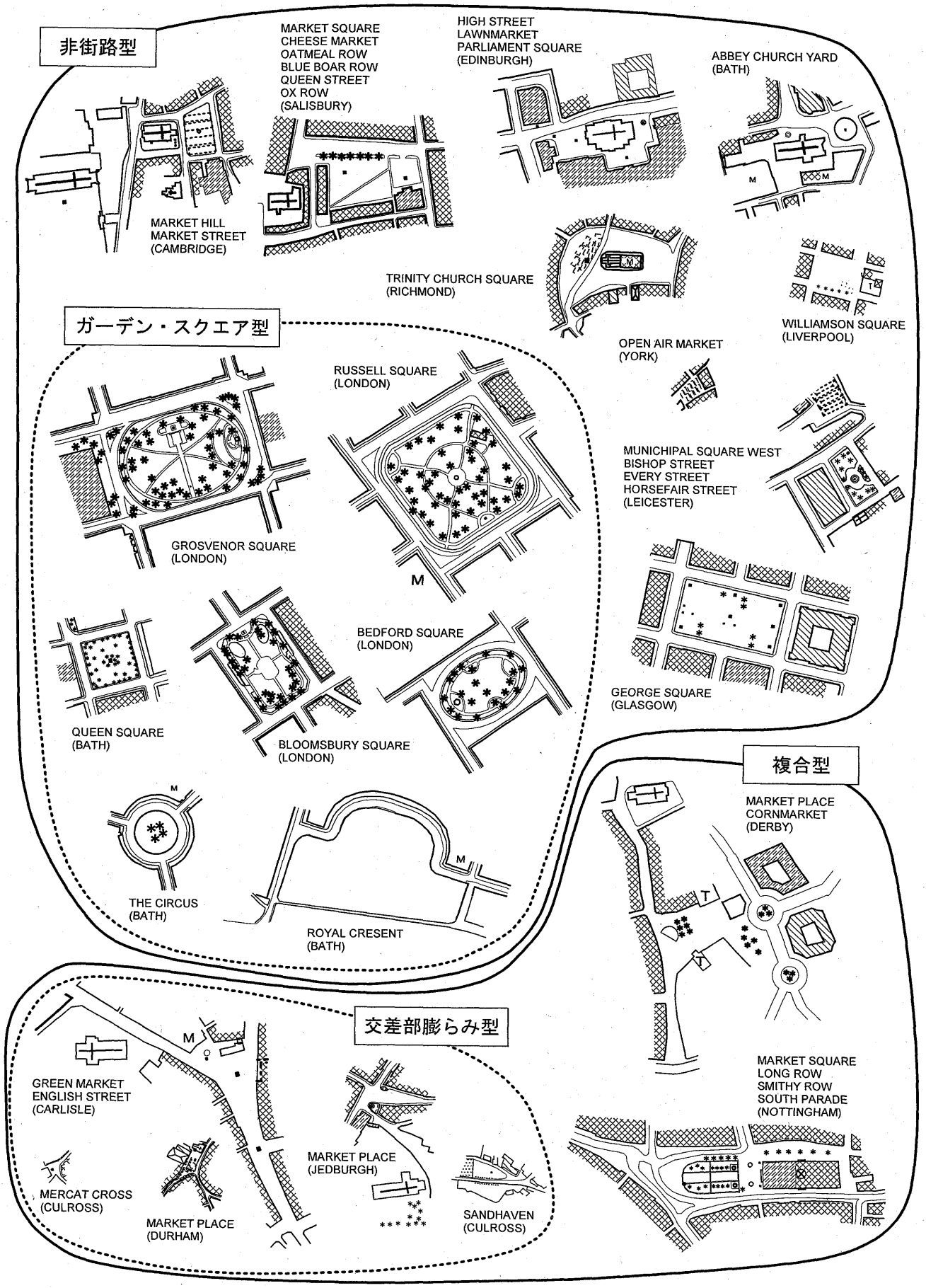
凡例



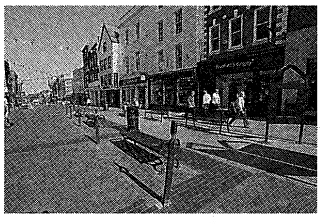
規模	広場機能	周辺建築物	資料	都市および広場の概要
1)+2)=4948.7㎡	市場広場 教会後広場	ギルドホール セント・メアリー大教会 商業施設 地下市場関連施設 噴水 露店	資料001　資料018 資料003　資料019 資料006　資料022 資料007　資料023 資料008　資料038 資料010 資料014 資料015 資料017	ケンブリッジシャーの州都でオックスフォードと並ぶ大学都市として知られており，イギリスの学術の中心地。町の中心部には歩行者専用空間が整備されている。マーケット・ヒルは中世の頃から市場広場として利用されており，マーケット・クロスも建っていた。また，広場中央には建物が建っていたが，18世紀末には姿を消している。現在も毎日8～16時半に市が開かれ，食料品や衣類等を売る露店が並ぶ。日曜日のみ時計市となる。広場に面するセント・メアリー大教会の塔からは広場及び町並みを見渡すことができる。 担当者　市島　侑里枝
9895.9㎡	通り広場 市庁舎前広場 城前広場 博物館前広場	市庁舎 コルチェスター城，博物館 自然史博物館 バス停留所 郵便局 商業施設	資料001 資料003 資料006 資料007 資料008 資料010 資料014 資料019	コルチェスターは，書物に出てくる町としては，英国最古の都市である。西暦43年にローマ人が上陸して，この地を首都に定めたが，すぐにロンドンに移した。中・近世には港湾都市として，また毛織物産業の地として成長した。清教徒革命時には，王党派の拠点だったため，議会軍から3ヶ月におよぶ攻撃を受けた。現在，町の中心であるハイ・ストリートは車の通りが激しく，通りの脇には駐車スペースも設けられ，もはやかつての面影は残っていない。だが，コルチェスター城は当時のまま残っており，当時の施工技術を目の当たりにできる。内部は博物館になっている。また，市庁舎は町のシンボルとなっている。 担当者　鴨居　朋子


街路型
UNION STREET
STALL STREET
(BATH)
WESTGATE STREET
EASTGATE STREET
SOUTHGATE STREET
NORTHGATE STREET
COLLEGE STREET
THE CROSS
(GLOUCESTER)
PARLIAMENT STREET
ST. SAMPSON'S SQUARE
(YORK)
SHAMBLES
(YORK)
BUCHANAN STREET
ROYAL EXCHANGE SQUARE
ROYAL BANK PLACE
SOUTH EXCHANGE PLACE
(GLASGOW)
BROAD STREET
(OXFORD)
TOWN HALL SQUARE
ST.WERBURGH STREET
(CHESTER)
HIGH STREET
OLD GEORGE MALL
(SALISBURY)
CORNMARKET STREET
CARFAX
HIGH STREET
(OXFORD)
EASTGATE STREET
WATERGATE STREET
NORTHGATE STREET
BRIDGE STREET
THE CROSS
(CHESTER)
MARKET STREET
HIGH STREET
COURT STREET
BRITANNIA WYND
BROAD WYND
JAIL WYND
(HADDINGTON)
GALLOWTREE GATE
HUMBERSTONE GATE
EAST GATES
HAYMARKET
(LEICESTER)
HIGH STREET
(COLCHESTER)
HIGH STREET
LOWER HIGH STREET
(CHIPPING CAMPDEN)
HIGH STREET
THE GREEN
(BROADWAY)
BROAD STREET
(STIRLING)
0
100m

図－3　類型図


非街路型
MARKET SQUARE
CHEESE MARKET
OATMEAL ROW
BLUE BOAR ROW
QUEEN STREET
OX ROW
(SALISBURY)
HIGH STREET
LAWNMARKET
PARLIAMENT SQUARE
(EDINBURGH)
ABBEY CHURCH YARD
(BATH)
MARKET HILL
MARKET STREET
(CAMBRIDGE)
TRINITY CHURCH SQUARE
(RICHMOND)
WILLIAMSON SQUARE
(LIVERPOOL)
OPEN AIR MARKET
(YORK)
ガーデン・スクエア型
RUSSELL SQUARE
(LONDON)
MUNICHIPAL SQUARE WEST
BISHOP STREET
EVERY STREET
HORSEFAIR STREET
(LEICESTER)
GROSVENOR SQUARE
(LONDON)
BEDFORD SQUARE
(LONDON)
GEORGE SQUARE
(GLASGOW)
QUEEN SQUARE
(BATH)
BLOOMSBURY SQUARE
(LONDON)
THE CIRCUS
(BATH)
ROYAL CRESENT
(BATH)
複合型
MARKET PLACE
CORNMARKET
(DERBY)
交差部膨らみ型
GREEN MARKET
ENGLISH STREET
(CARLISLE)
MARKET SQUARE
LONG ROW
SMITHY ROW
SOUTH PARADE
(NOTTINGHAM)
MERCAT CROSS
(CULROSS)
MARKET PLACE
(DURHAM)
MARKET PLACE
(JEDBURGH)
SANDHAVEN
(CULROSS)

写真－1　グラスゴーの BUCHANAN STREET



写真－2　グロスターの WESTGATE STREET

イギリスの街路には，ハイ・ストリート（High Street あるいは The High），ブロード・ストリート（Broad Street）という名称がよく使われている。「本町通り」，「大通り」などと訳すことができ，その名のとおり町のメインストリートとなっている。街路型広場16事例中，現在も町のセンターとしての機能を果たす事例は7事例であった。それ以外では，車の交通量の多い幹線道路となってしまっている例もあったが，かつては町の中心であったと考えられる。

gate という名称もよくみられるが，EASTGATE STREET（東門通り），NORTHGATE STREET（北門通り）のように「門」の意味で使われる場合と，EAST GATE（東通り），HUMBERSTON GATE（HUMBERSTON 通り）のように，「通り」の意味で使われる場合がある。

また，チェスター中心部の街路型広場には，ザ・ロウズ（THE ROWS）と呼ばれる建物が並んでいる。ザ・ロウズは，2階部分がアーケードになっており，建物を渡り歩くことができるという特徴をもつ。一般に13世紀頃作られたといわれているが，当時は倉庫や店が1階に作られ，2階は主な居住スペースとなるホール，その上は私室となっていた。16世紀以降2階にも商業施設が作られ，現在はショッピングモールのようになっている。街路に面して所々に2階へ上がる階段が設けられており，1階と2階を行き来しながら買い物をすることができる。2階にはカフェが配置されている部分もあり，通りを見下ろしくつろぐことができる。

写真－3　ハーフティンバーのファサードが続くザ・ロウズ。

写真－4　2階のカフェからは通りを見下ろすことができる。

（7）　ガーデン・スクエアと都市

ロンドンとバースの調査事例をもとに，ガーデン・スクエア（後述）における広場と住居の関係から，都市と広場，都市と住居の関係について記述する。

①　ロンドンの広場

ロンドンには，数多くの公園や広場があり，都市のオープンスペースとして市民・観光客の憩いの場となっている。特にシティと呼ばれる中心部の西側には，大小様々な大きさと形の緑地が点在し，それらにはパーク（park　公園，「狩猟用囲い地」が原義）・スクエア（square　広場・四角い広場）・クレセント（crescent　三日月型の街路・家並み）・プレイス（place　短い通り・広場，「広い通り」が原義）の名前が付けられている。これらには，ハイド・パークに代表される国所有のロイヤル・パークや，自治体が所有管理するもの，また民間が所有するものもある。その中に，エステート（estate　詳細は②参照）を成因とする広場がある。本稿では，こうした広場を「ガーデン・スクエア」*1とする。ガーデン・スクエアは，いずれも土地の一区画に囲いのある緑地を配し，公共の道路に囲まれ，そこに面する建物入口へのアクセス空間となっているという共通点がある。またそこには，市庁舎や教会，市場施設といった中心になる建築物は見あたらない。周囲の建築物はほとんどが住宅建築であり，高さの揃えられたファサードにより囲われた空間を創り出している。

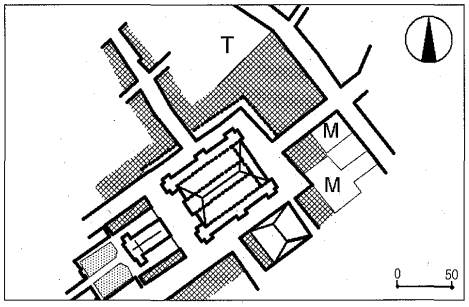
*1　『感性の都市空間』（資料032），宍戸修はガーデン・スクエアを「庭園付家並び広場」としている。

②　エステート

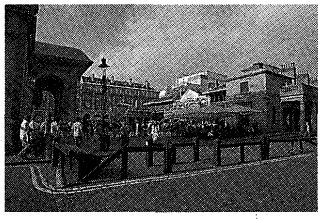
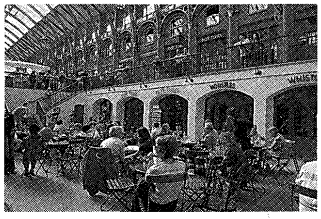
18世紀から19世紀，ロンドンでは少数の大地主が土地を所有していた。これは1536年，ヘンリー8世が宗教改革によりロンドン西部の土地を修道院から買い上げたり没収したりして，土地の権利を取得したことに端を発する。その後国王がこれらの土地を貴族に譲渡していくことで地主が誕生したのである。

地主は，エステートという土地のまとまりを所有していた。エステートとは「地所・土地」の意味である。地主たちは19世紀半ばまで，それぞれが思い思いに自分のエステートの開発を行った。言い換えれば，それぞれの地主がそれぞれの私有地を，ひとつのまとまりとして開発する，つまりエステート単位の町づくりを行っていたことになる。こうした地主による開発は，エステートごとにその中心となる広場を設けるという手法を生じさせる。現在，ロンド

ンの観光ポイントのひとつとなっているコヴェント・ガーデン（GBR-00-03，学苑766号）もそうしたエステート単位の開発によって設計された広場である。ここは，本来修道院（convent）の庭であった土地がヘンリー8世の時代に宗教改革によって没収され，その後ベドフォード伯爵領となった地である。1630年，ベドフォード伯爵が建築家イニゴ・ジョーンズに設計を命じ，自分のエステートの中にイタリア風の広場をつくり教会を建てる。当時，密集した都市内においてこうしたオープンスペースが人気を得て，その後ロンドンにいくつもの計画的な広場がつくられていくことになる。レスター・スクエア（1635年），ブルームズベリー・スクエア（1665年），ソーホー・スクエア（1681年），グロヴナー・スクエア（1720年），バークレー・スクエア（1698年）などである。

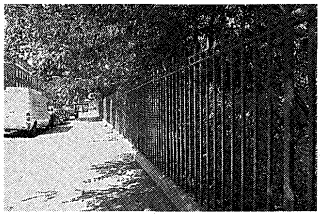
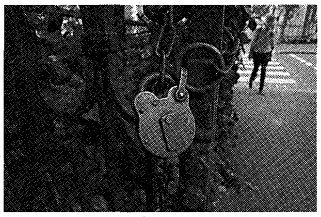


図－4
コヴェント・ガーデン広場図

写真－5, 6　現在のコヴェント・ガーデン

これらのガーデン・スクエアの多くは，スクエアの名の通り四角形の平面をもち，四方を建物と道路に囲まれたオープンスペースを柵によって囲い，その柵の内側を緑地としている。この柵には門扉が取り付けられており，その開放の方法はそれぞれの広場によって異なる。時間帯で門扉が開放・施錠される広場，また鍵の所有者のみの利用に限定している広場といった具合である。

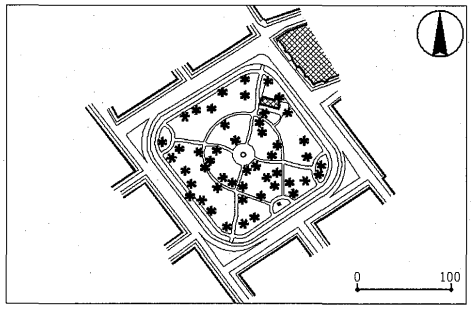



写真－7　柵で囲まれた緑地　　**写真－8**　門扉の錠

③　ロンドンのガーデン・スクエア事例

次に今回調査を行った4つのガーデン・スクエアについて，その成り立ちと現在の様子について紹介する。

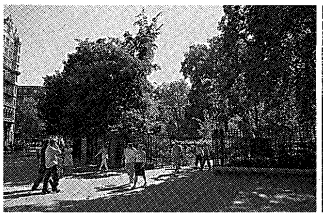
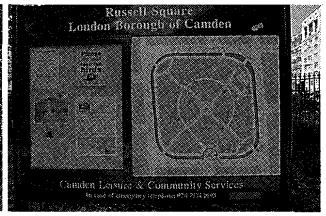
i）　ラッセル・スクエア（GBR-05-01）



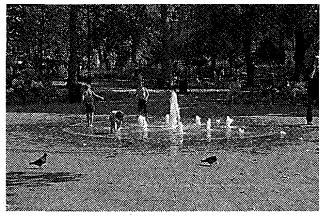
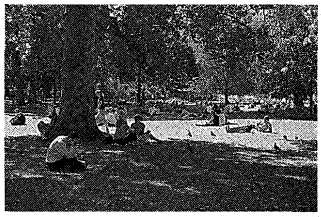
図－5
ラッセル・スクエア広場図

ブルームズベリー地区の最大のガーデン・スクエアで，ベドフォード・エステートの開発による広場である。ロンドン大学や大英博物館に隣接し，付近には若者の姿も多い。ラッセルとは，このエステートの所有者ベドフォード公爵家の本来の家名である。ラッセル家は王室に対する貢献を評価されて，1552年に王室からコヴェント・ガーデンの土地をもらい，同地の開発を行った地主でもある。このラッセル・スクエアは，1800年にハンフリー・レプトンが第5代ベドフォード公爵のために設計したものである。広場の南東側にはこの第5代ベドフォード公爵の像が立つ。

現在のラッセル・スクエアは，北東側をホテルの建物がしめ，緑地を囲む鉄柵の四隅に出入口が設けられている。緑地内北側の角のオープンカフェは，人々で賑わっていた。また緑地内の案内板にはこの地を管理するキャムデン自治区と緊急時の連絡先，開門時間（7時～22時），「鳥に餌を与えないでください」という注意書きなどが記されていた。中央の噴水は2002年3月に改装され再開された。

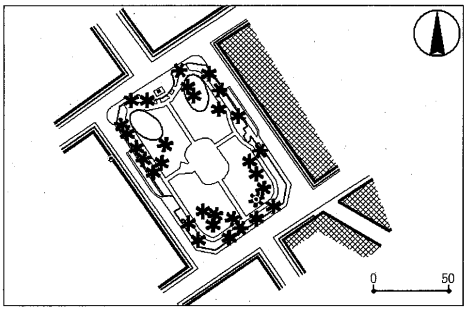



写真－9　ラッセル・スクエア入口　　**写真－10**　案内板

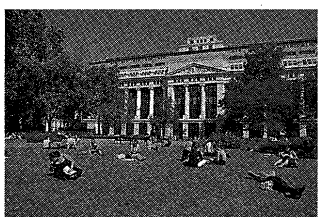
写真－11　緑地中央の噴水　　**写真－12**　緑地内の木陰

ii） ブルームズベリー・スクエア（GBR-05-02）

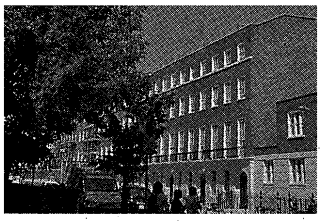


図－6 ブルームズベリー・スクエア広場図

ブルームズベリーの名は，サクソン時代のウィリアム・プレマンドの領主邸の名（Blemondisbury）に由来する。サウサンプトン伯爵家は1545年王室からこの土地をもらい，17世紀にブルームズベリー・スクエアの開発を行った。その後サウサンプトン伯爵家のエステートは，婚姻によりラッセル家のベドフォード・エステートの一部となる。広場の開発を行った第4代サウサンプトン伯爵は，広場3面に富裕な階級向けの邸宅を，北面に自分の屋敷を建てた。その後，第5代ベドフォード公爵の時代にこの邸宅は壊され，その跡にベドフォード・プレイスが建設された。これはブルームズベリー・スクエアとラッセル・スクエアを結ぶ道路で，両側のロウ・ハウス（詳細は⑤参照）によって構成された通りの空間である。

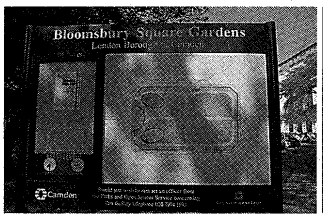


写真－13 ブルームズベリー・スクエアの緑地

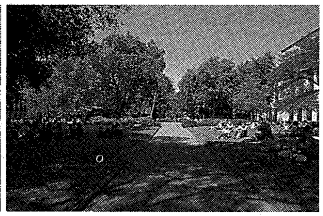


写真－14 ベドフォード・プレイス

1960年代広場地下に駐車場ができた。現在広場を囲む建物には会社やホテルがはいり，周辺道路は路線バスのルートとなっている。そのような中，鉄柵に囲まれた緑地には，芝生に寝ころんだりベンチで読書をする人など思い思いに過ごす多くの人がいた。緑地内の案内板には，ラッセル・スクエア同様この地を管理するキャムデン自治区とその連絡先，開門時間（7時30分～21時）などが記されていた。

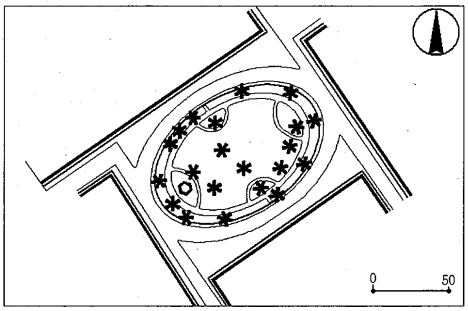


写真－15 案内板



写真－16 緑地中央の園路

iii） ベドフォード・スクエア（GBR-05-03）



図－7 ベドフォード・スクエア広場図

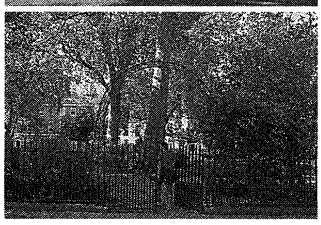
第4代ベドフォード公爵の未亡人ガートルードがトマス・リバートンに設計を依頼し1772年に開発した。近隣のラッセル・スクエアやブルームズベリー・スクエアが自治区管理であるのに対し，こちらは現在もベドフォード・エステートの所有地である。緑地入口付近の案内板には，この地が私有財産であること，鍵の所有者のみの利用に限ること，犬の散歩やボール遊びの禁止などが記されている。

写真－17 案内板

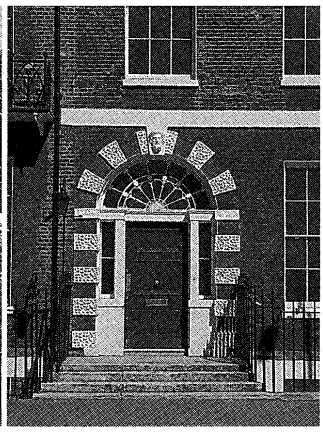
写真－18 閑散とした緑地

現在建築事務所や出版社がはいった広場を囲むロウ・ハウスは，高さの揃った窓や等間隔に並んだ煙突，入口ドア周りや，その上部の半月形の窓などデザインが統一されている。広場内は交通量も少なく，落ち着いた雰囲気である。楕円形の平面をもつ緑地出入り口の門扉は，ラッセル・スクエア等に比べると小さく，私的な空間という印象であった。緑地内は公園風に整備されているが，一般に開放されている前述2つのガーデン・スクエアと比べ，樹木が生い茂り素朴な印象であった。

写真－19 緑豊かなベドフォード・スクエア

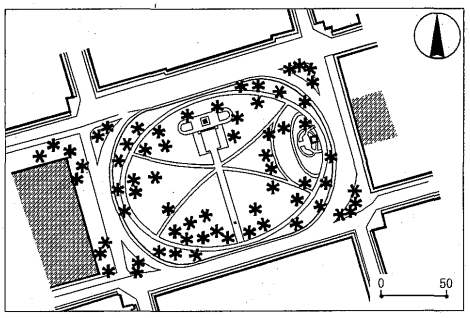


写真－20 緑地の入口



写真－21 ロウ・ハウスの住戸入口

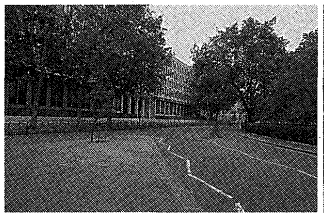
iv） グロヴナー・スクエア（GBR-05-04）



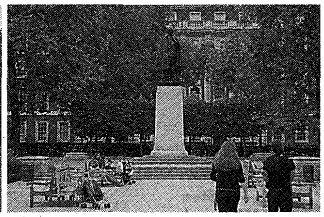
図－8 グロヴナー・スクエア広場図

グロヴナー・エステートのメイフェアー地区の中心的ガーデン・スクエアである。グロヴナー家（ウェストミンスター公爵家）は，1720年からこの地区の開発を始めた。地主の名を冠したグロヴナー・スクエアは1725年につくられ，24,000㎡の面積をもつ大規模なガーデン・スクエアである。第二次世界大戦により広場とその周辺は大きな被害を受け，1948年全面的に再構築された。広場はこの年までグロヴナー・エステートによって管理されていたが，その後，ロイヤル・パークへと譲渡された。

また1930年代からこの広場はアメリカ合衆国と強い関係をもつことになる。まず1938年広場西側にアメリカ大使館が建てられた（現大使館は，1961年エーロ・サーリネンによる設計）。そして現在広場の他の3辺もほとんどがアメリカ国務省関係のオフィスとなっている。

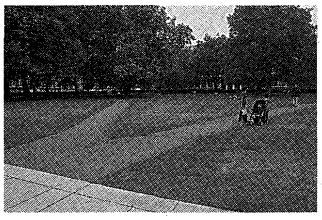


写真－22 アメリカ大使館と広場



写真－23 フランクリン・ルーズヴェルトの像

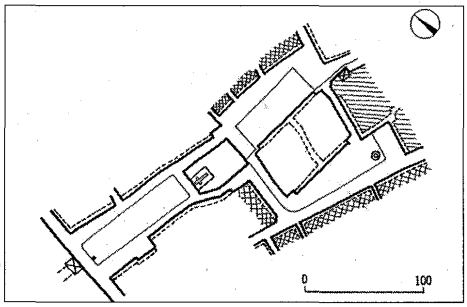
また広場中央にあったジョージ1世像にかわり，1948年ルーズヴェルト大統領記念碑，1985年には英国空軍と共に戦ったアメリカ人パイロットの慰霊碑が設置された。広場は現在，この2つのモニュメントを結ぶ南北の軸線を中心にほぼ対称形のデザインで，公園風に整備され，整然とした印象の空間であった。開門時間は7時30分から日没まで，緑地を囲う柵には植物が施され生垣風である。



写真－24, 25 グロヴナー・スクエアの緑地の様子。

④ ガーデン・スクエアと町並み

前述のように，エステートごとに中心となるガーデン・スクエアをつくる開発手法によって，ロンドンには数多くの広場が点在することになるが，それらが他の広場と複合的につながることはほとんどなく，大通りと直接的につながることもない。つまりそれぞれの広場は独立した形態をなす（各広場図参照）。イタリアなどに見られる他と連続した平面形態をもつ広場と比較するとその違いは明確である。



図－9 イタリア，パドヴァの広場図（ITA-94-027～029，学苑671号）

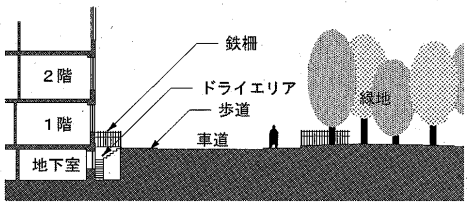
こうした広場形態は，ロンドンの町の開発がエステートごとのまとまりを優先して行われたことの現れであり，小さな単位ごとの町並みの連続という継ぎ接ぎ的状況をつくりだしていることになる。しかし，全体としては継ぎ接ぎであっても，個々の広場単位としてはまとまりのある空間となっている。それは，こうした広場を囲う住宅と広場の関係からみて取ることができる。

広場に面して建てられた住宅の住人は，その広場に巡らされた柵の鍵を与えられる。住人たちは鍵のかかる広場を，共有の私的庭園として使用できるのである。通りすがりの人はこの広場を利用することはできない。そして今日でもこのような管理体制を維持している広場もある。（ベドフォード・スクエア GBR-05-03参照）

⑤ ガーデン・スクエアとロウ・ハウス

ガーデン・スクエアの外周には一様に高さの揃った建物が並ぶ。これらはロウ・ハウスと呼ばれる集合住宅である。ロウ（row）とは横に真っ直ぐ並んだ列や並びを意味し，ロウ・ハウスは連続してひとつのつながりを形成している住居ということになる。一般には連続住居，または長屋建住居と訳される。

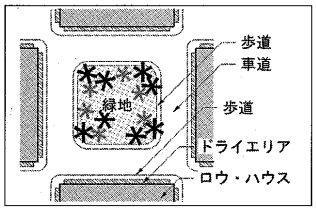
このロウ・ハウスは17世紀後半～18世紀初めにかけて，現在見ることができる形式の基本形が完成し，その後時代により様々な意匠によるバリエーションが生まれている。しかしその建築的特徴として，1階床面が歩道より高いことや建物の前面に幅2m程のドライエリアが設けられることを共通して挙げることができる（住戸の入口はこのドライエリアをまたいで階段を数段上がったところに設けられる）。



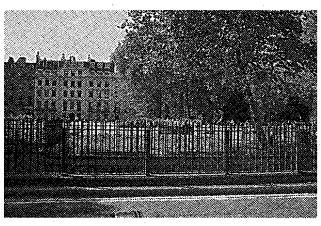
図－10 ガーデン・スクエア断面モデル図

これらの特徴は，ロウ・ハウス各住戸内と広場側の視線の高さに差を生じさせ，ドライエリアという緩衝空間を設けることで歩道から適度な距離を保つことができる。また歩道との境界に鉄柵を設けることにより，安全でプライバシーの確保された都市住居を実現させている。

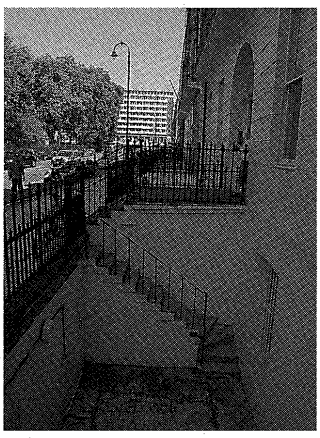
そしてこうしたロウ・ハウスが，ガーデン・スクエアの輪郭を構成する。この輪郭から内に向かうと，ロウ・ハウス→（歩道）→道路→（歩道）→柵→緑地となる。その最も内側の空間である緑地と道路との境界には柵が設けられているが，この柵により緑地内部は関係者以外の侵入を許さない安全で快適な人間のための空間となる。さらに，この境界が風景を遮断する壁ではなく，中の様子がうかがえる柵であることにより，道路側からの景観も良好なものにしている。



図－11 ガーデン・スクエア平面モデル図



写真－27 道路側からは柵越しに緑が見える。



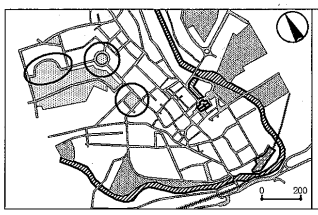
写真－26 ロウ・ハウス前面に設けられたドライエリア。

このようにガーデン・スクエア内の人と車の領域は，ドライエリアと鉄柵といった2つの異なる要素によって仕切られており，これらはいずれも柔らかな境界を創り出している。この柔らかな境界によりそれぞれの空間はつながりをもち，ガーデン・スクエアを，ロウ・ハウスに囲まれたひとつのまとまりのある空間として認識させてくれる。

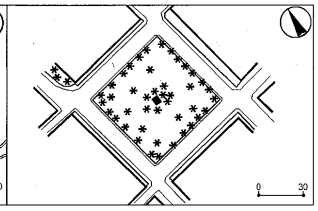
⑥ 都市と住居

i） バースの町並み

ロンドン市内に数多くのガーデン・スクエアがつくられたのは17世紀のことであるが，都市の中で住宅が広場の輪郭を形づくる手法はイギリスの他の都市でも用いられた。バースはイングランド西部の都市で，その名の示すとおり温泉保養地として名高い。1728年，建築家ジョン・ウッドにより設計されたクイーン・スクエア（GBR-05-09）は，矩形の広場の三面を連続住宅で囲み中心部に緑地帯を設けるというロンドンのガーデン・スクエアに類似した空間構成となっている。

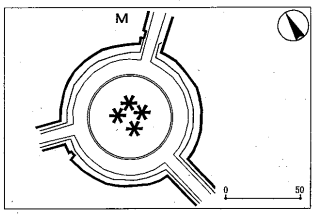


図－12 バース都市図（○印はジョン・ウッド設計の3つの広場位置）

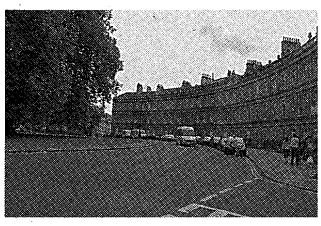


図－13 クイーン・スクエア広場

次にジョン・ウッドはバースで，ザ・サーカス（キングズ・サーカス）（GBR-05-10）と呼ばれる円形広場の設計も手がけている。周囲は円弧を三分割した3つの連続住宅が囲み，中央に緑地帯が設けられている。

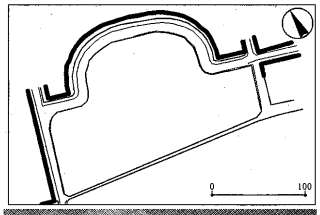


図－14 ザ・サーカス広場図

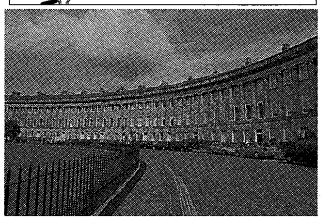


写真－28 ザ・サーカスと緑地

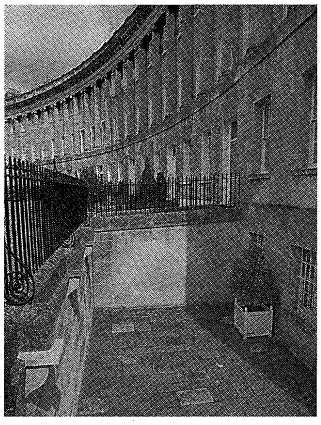
バースのさらなる開発として，ジョン・ウッドの息子，ジョン・ウッド・ザ・ヤンガーによるロイヤル・クレセントが設計された。これは三日月型の連続住居が，緑地に向かって開いた配置をなす。



図－15 ロイヤル・クレセント広場図



写真－29 全景



写真－30 ロイヤル・クレセントのドライエリア

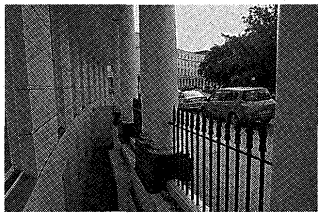
こうしてバースの町には，700mほどの間に矩形・円形・三日月型の区画ができあがった。これらを年代順にみていくと，ほぼ正方形の矩形，円弧が三分割され対称性の崩された円形，そして開いた図形である三日月型へと変化していることがわかる。すなわち都市空間を住居で囲んで区画する手法から，壁を建てて仕切るという手法へと向かう。いずれの場合も，住居をつくることで都市の形を創り出しているのだが，そこには空間創出の意識の変化を読みとることができる。

ii） リージェンツ・パーク

ロンドンのリージェンツ・パークはヘンリー5世以来，イギリス王室の狩場であった。1811年ジョージ4世（当時は皇太子）が摂政となり，建築家ジョン・ナッシュにこの土地の開発を命じる。当時イギリスは国力が充実し，ロンドン市域も拡大しつつあった。その北端にあるこの土地が荒れ地のままであり，勃興しつつある富裕な市民のための住宅供給を目的に開発する計画がなされた。開発が実施されたのは1812年から1825年である。

計画の概要は，直径約1マイル（1.6km）の円形の公園の外周をテラス・ハウスが取り囲むもので，公園の半周約3kmの連続住居群が建てられた。

写真－31 リージェンツ・パーク南端のパーク・クレセント

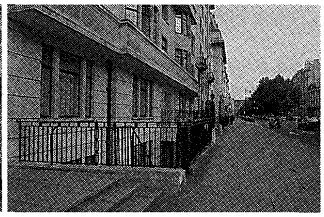


写真－32 ドライエリアと鉄柵

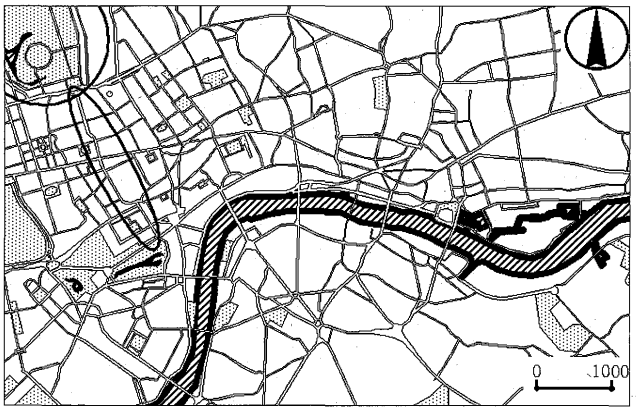
この計画は，連続住居による囲み空間を創造し住居と緑地をセットにするガーデン・スクエアと同様の手法を大規模にしたものであろう。ただしガーデン・スクエアの場合はもともと規模が小さく，「囲う」ことで土地を区画することから開発がスタートしたのに対し，このリージェンツ・パークの計画は既にある巨大な空地を「囲う」計画で，それは結果的に輪郭に沿って住宅を「並べる」ことになった。

またジョン・ナッシュは，この公園から南へ向かうポートランド・プレイス（当時は立派な邸宅が並ぶ私道で，南端で袋小路となっていた。）を延ばし，リージェント通りとその南端ウォータルー・プレイス（1828年），その先セント・ジェームズ・パークの北側カールトン・ハウス・テラス（1827～32年）をつなぐ構想をもっていた。実際，彼の計画は一部しか実現しなかったが，この計画は住居を「並べる」ことで都市の主軸を構成しようとしたものであった。

現在のロンドンの町では，ロウ・ハウスの形式をもつ建物が並び，統一されたリズムをもつファサードとドライエリアを囲う鉄柵が風景の一部となっている。約300年もの間，これらの形式が時代と共に様々なバリエーションを生み出しながら，人々に受け入れられてきたのである。



写真－33, 34 現在もドライエリアと鉄柵の付いた住居が並ぶポートランド・プレイスの様子。



図－16 ジョン・ナッシュが設計・計画したリージェンツ・パークとそれに続く通り。

⑦ まとめ

これまでヨーロッパ諸国で多くの都市広場を見てきた。それらの多くは市庁舎や教会等中心要素となる建築物が，広場に面するか，内蔵*2されるものであった。また広場は人の集う場所であり，基本的に出入りが自由でそこでの行為は限定されない空間であった。しかしガーデン・スクエアは，周囲に中心要素となる建築物はなく，プライバシーが保たれ，出入りは時間で制限され，禁止事項のある空間であった。その意味ではこれまで調査した「広場」とは異なる空間であるが，広場を都市におけるオープンスペースとしてとらえたとき，ガーデン・スクエアは明らかに「広場」であり，都市空間の構成要素のひとつである。

本稿では，ロウ・ハウスの内側は全て広場の領域ととらえた。実際にはこの領域に道路が通り，通過交通を許しているが，その範囲も含めて広場とした。これは前述のようにドライエリアや鉄柵という柔らかな境界を用いた手法によって，一体的な空間が創り出されていると判断したためである。車の領域を排除するのではなく，上手く広場内に取り入れることで車と人の共存を可能にしている。

またロウ・ハウス側から見れば，道路の向こうにある自分たちの土地は，都市の景観のひとつである。進入は制限されているものの，緑豊かな景観は共有のものである。住人にしてみれば，そうして社会との関わりをもつことができたのであろう。こうした意識が，やがて次の時代に，「囲う」という閉じた形態から「並べる」という開いた形態へと手法を展開させ，都市の骨格を形づくる住居群へと発展させたのではないだろうか。

ガーデン・スクエアという私的な空間から，都市の主軸を成す大通りの計画まで，同じ連続住居の形式をもつ建物によって形づくられていることは興味深い。

＊2　内蔵型広場については，以下を参照。
日本建築学会大会学術講演梗概集「内蔵型広場の平面形態による類型化」，高木亜紀子・芦川智・鶴田佳子・金子友美，2004年，E-1分冊，p. 1023

（8） 広場のクロスの造形

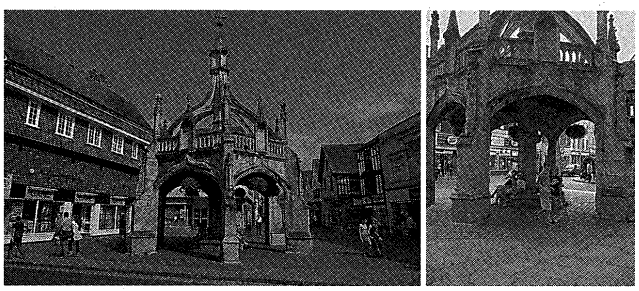
イギリスの広場には「クロス」という造形物が存在することが多く，広場の意味を象徴的に示していると思われる。このクロスの形態をひとつのテーマとして追った。

① 都市とクロスの事例

i） ソールズベリ SALISBURY（GBR-05-05, 06）

イングランド南西部の町ソールズベリの MARKET SQUARE（市場広場）には1335年に建てられた THE POULTRY CROSS というクロスがある。

クロスは MINSTER STREET と BUTCHER ROW の角にあり，現在のクロスは15世紀末に再建された。中世 BUTCHER ROW は，町の商取引の中心地であり，人々はクロスのアーチの下で，農作物を持ち寄り，売買した。また，行事の際そこは野外説教の場所となった。現在も開かれる地域の市では，地方の生産物を販売する店はクロスの周りで店を開く。1219年に初めて市が開かれ，1361年以降は火曜日と土曜日に開かれている。

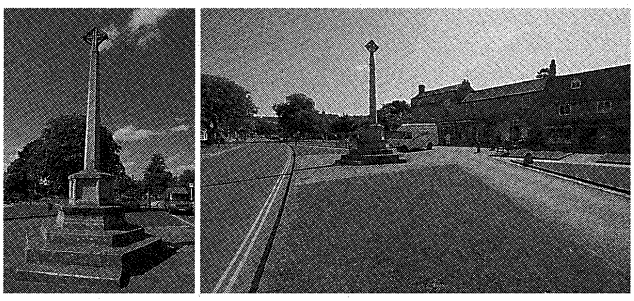


写真－35, 36　ソールズベリのクロス

クロスは，六角形の柱組で屋根を支え，ヴィクトリア時代，中心の小尖塔を取り囲む装飾的な飛び梁が加えられた。クロスの反対側にある建物や，同年代の建物は，宿屋などのハーフティンバーの建物である。当時この周辺には多くの宿屋があった。それは，ST. OSMUND（1074～78年イングランドの大蔵大臣，1078～1099年ソールズベリの主教。1457年に列聖）の教会や大聖堂を訪れる巡礼者が多かったためで，宿は巡礼者で賑わった。

ii） ブロードウェイ BROADWAY（GBR-05-13）

イングランド中央部コッツウォルズ地方にブロードウェイという町がある。その町にある MEMORIAL CROSS という名称のクロスは，1251年頃に建てられたという。



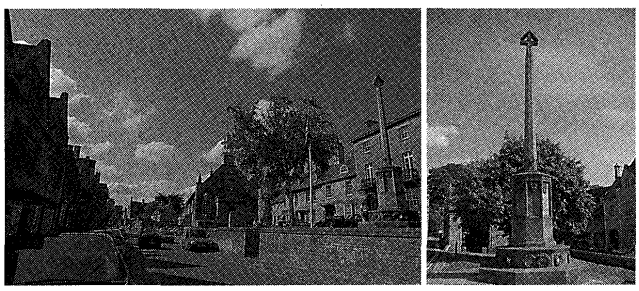
写真－37, 38　ブロードウェイのクロス

ブロードウェイは今から500年ほど前に，羊毛を売買する商人によって繁栄した町である。この町のメインストリートであるハイ・ストリートの端には，THE GREEN と呼ばれる広い芝生地帯があり，クロスはその一角に建っている。THE GREEN 一帯は紀元前の昔から町の中心地であり，市が開かれる場所でもあった。また，かなり古くから人が住んでいたようで，発見された遺物の年代から，前1900年頃の古代ビーカー人時代にまでさかのぼるという。その後，キリスト教が伝わり各地に修道院が建てられたが，ブロードウェイは，早い時期からベネディクト派の修道院 PERSHORE の領土になったとみられる。そうした記載が927年のエドガー王による憲章にも認められる。その後1538年のヘンリー8世による改革の年までの560年間，ブロードウェイは PERSHORE 大修道院長により所有されていた。

市が開かれるようになったのは，1251年に PERSHORE 大修道院長により，毎週火曜日と，3日連続開催の定期市を行うことが認められたことにはじまる。市には，若い男性や女性が来て働いていた。彼等は THE GREEN の角に建つクロスの側に立っていた雇い人に仕事をしたいと申し出て，仕事をもらっていたという。

iii） チッピング・カムデンCHIPPING CAMPDEN（GBR-05-14）

ブロードウェイ同様コッツウォルズ地方の小さな町，チッピング・カムデンには町の中心を貫通するメインのハイ・ストリートに，市場を示すクロスがある。建設年代と名称は不明である。



写真－39, 40　チッピング・カムデンのクロス

この町では13，14世紀頃から市が立ち，後にウールタウンとして栄えた。市では，チーズやバター，家禽などが売られていたという。町の中心部のマーケット・ホールは1627年にBaptist Hicks卿が約£90で地域の農産物市場として建設した。これまで同様，現在もマーケット・ホールとマーケット・スクエアは，チャリティー・マーケットなどのイベントで使われている。

ハイ・ストリート全体とそこに多く見られる休息所は，“来世紀まで残しておきたい美しい町並み”として，1970年2月に保存地区に指定された。

iv） チェスターCHESTER（GBR-05-15, 16）

イングランド中西部チェシャー州の都市チェスターにはチェスター・クロスまたはハイ・クロスと呼ばれるクロスがある。1407年に建設され，旧市場やイベントの開催場所，元公開処刑場所，公的布告地点等の意味をもっていた。チェスターは，ローマ都市に一般的な直行する街路形態を基盤としている。4本の主要な通りの交点は，THE CROSSと呼ばれ，昔から町の中心地であった。そこにチェスター・クロスは建っている。クロス周辺は，現在もハーフティンバー様式のファサードをもつザ・ロウズと呼ばれる建物が続いている。

写真－41, 42　チェスターのクロス

これら4本の通りはそれぞれ，北はNORTHGATE STREET，南はBRIDGE STREET，東はEASTGATE STREET，西はWATERGATE STREETと呼ばれ，その交差点であるTHE CROSSを見渡す建物はローマ時代，司令部PRINCIPIA（=巨大な合同庁舎，フットボール競技場ほどの大きさだった）だった。その後，ローマ人はイギリスから撤退し，チェスターは荒廃した。その約500年後の907年，サクソン人がPRINCIPIAの廃墟にST. PETER'S教会を創設し，新たなチェスターの歴史が始まった。

中世，15世紀の頃のクロス周辺は，裁判所や教会が建ち並び，市場が開かれていた。中世を通してST. PETER'S教会の正面に隣接していたハーフティンバー様式の裁判所は，PENTICE（またはペントハウス）と呼ばれた。裁判で裁かれた罪人は，クロス周辺で鞭打ち刑にされたり，さらし台でさらされたりした。また市場では，熊や牛の残酷な見世物が行われることもあった。そういった場の中心的な存在であるクロスは，金色に塗られ，飾り立てた塔頂の壁の窪みには聖人が彫られていた。現在のクロスは1407年に建てられた。1646年に議会派によって一度打ち倒され，その後1975年に元の位置に戻されたが，頭頂部の小彫像などは未だ発見されていない。

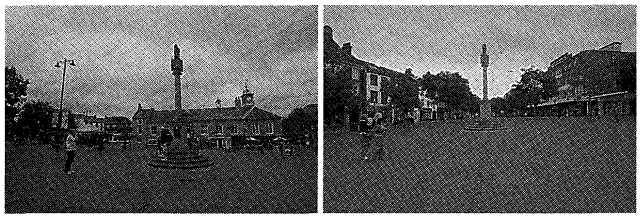
現在クロス周辺では，夏に段上から修道服姿のタウンセーラー（町のおふれ役）が布告を発するイベントが行われたり，周辺で大道画家，巡回説教者，大道芸人による催し物が行われたりして，活気のある場所となっている。

v） カーライルCARLISLE（GBR-05-18）

イングランド北部カンブリア州の州都であるカーライルにはカーライル・クロスと呼ばれる，市場の開かれる場所を示すクロスがある。1682年に建設されたが，現在あるものは1988年に再建されたものである。

カーライルはローマ人の居留地として発展し，ローマの撤退後はその地理的位置ゆえにイングランドとスコットランドの間で争奪された。1092年ウィリアム2世が城壁を築き，以後イングランド北部の防衛拠点として発達した。12世紀に自治都市としての勅令を受け，主教座聖堂が建てられた。中世期を通じて，イングランド人がスコットランドを攻めるための軍事拠点として，さらにカーライルを発展させた。

清教徒革命時，国王派となったカーライルは，議会派のスコットランド軍に9ヵ月にわたって包囲され，その度重なる攻撃と飢えの前に陥落した（1644～45年）。1745年，ジェイムズ2世の子孫であるチャールズ・スチュワートが町に侵攻し，市場のクロスの前で，父親である王の復権を宣言したが，数週間後にはイングランドに奪回された。



写真－43, 44　カーライルのクロス

カーライルのグリーン・マーケットはマーケット・プレイスとも呼ばれ，旧市街の中心地に位置する。現在でも，毎月第1金曜日に農産物の市が開かれている。このマーケットからCASTLE STREETに入ったところには，カーライル大聖堂がある。もともとは，1122年に修道分院として建てられたもので，1133年に大聖堂に改築された。

vi）　スターリングSTIRLING（GBR-05-21）

スコットランド中央部の町スターリングのブロード・ストリートにマーカト・クロス（THE MERCAT CROSS）がある。建設年代は不明で，もともと市場の開催場所，処刑場所，公的布告地点等を示す意味をもっていたと思われる。

写真－45, 46　スターリングのクロス

スターリングは，古くから「スコットランドへの鍵(Key to Scotland)」，すなわち「スターリングを制するものがスコットランドを制する」といわれるほど重要な町で，何世紀にもわたる戦いの舞台となってきた。

クロス周辺は16世紀頃，水・土曜日に開かれる市として栄えた。露店のほとんどはクロスの周りに並び，その他は，ST. JOHN STREETかJAIL WYNDの近くに並んでいた。市が立つ日のブロード・ストリートは，動物の鳴き声や，音楽，売り買いする人々の声であふれ，あるいはクロスの段上に立つベルをもった町のふれ役の姿が見られた。クロス周辺は，町の罪人が裁判所の処罰を受ける場であり，近くには町の行政施設として1705年に建設されたトルブースがあり，その後19世紀には裁判所と刑務所も加えられた。処刑は，多くの人々が集まる市の開催日に行われた。市には，買い物客目当てのすりや盗人がいたため，そうした者への見せしめの意味も含んでいたと考えられる。現在，この場所で市は開かれていない。

クロスの最上部には，ユニコーン（一角獣）が載っているが，これは当時からのものである。

vii）　クルロスCULROSS（GBR-05-22, 23）

スコットランド中央部の小都市クルロスの町には，現在も17～18世紀に造られた建物がそのまま残り，市場広場には，マーカト・クロスがある。

クルロスは，5世紀に聖サーフによって創設された，スコットランドファイフ州の自治都市であった。また，聖マンゴーの生誕地であり6世紀頃には重要な宗教上の拠点となった。塩の精製と石炭産業で発展した。

写真－47, 48　クルロスのクロス

黄色い壁とオレンジの瓦屋根が特徴的なブルース宮殿は16世紀に造られ，町の中心地となった。かつての町の中心地であるこの広場は，現在は住宅に囲まれこぢんまりとしている。クロスはベースだけが1588年に建てられた当時のままであるが，柱体と小彫像の部分は1902年に新しく建て替えられたものである。

viii）　エジンバラEDINBURGH（GBR-05-24）

エジンバラはスコットランド中央部エジンバラ州の州都である。そのメインストリートであるハイ・ストリートの中央部セント・ジャイルズ大聖堂の後ろにマーカト・クロスがある。建設年代は1365年であり，市場の開催場所，商人の取引地点，街の中心地点，公開処刑場，公的布告地点等を示すものと考えられ，その役割は多様である。

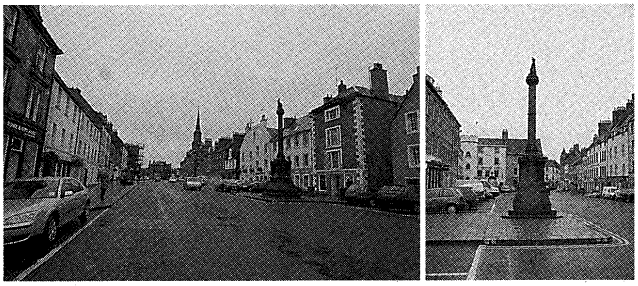
写真－49, 50　エジンバラのクロス

LAWNMARKET は中世の市場で，毎日乳製品や肉が売られ，週に1日は麻布や毛織物が売られていた。

クロスの建つパーラメント・スクエアは，はるか昔から18世紀まで，エジンバラの政治，法律，宗教の中心地であった。ここは税徴収所，議会，市庁舎，改革派スコットランド教会，裁判所と変わり，最終的に監獄と処刑場になった。クロスはもともと1365年の十字架であったが，その周辺は人々が商談したり，ニュースを交換したり，布告を聞く場所となり，また鞭打ちや処刑を見物する場所でもあった。クロスは，もとは商取引や公的布告地点等を示すものであった。現在のものはレプリカであるが，今でも重要な知らせは，伝統に従って，事件から3日後にここで布告される。「3日」の理由は，18世紀ロンドンからのニュースがエジンバラに届くのにかかった日数に由来する。

ix） ハディントン HADDINGTON（GBR-05-25）

スコットランド中央部の小都市ハディントンはメインストリートであるハイ・ストリートにマーカト・クロスが建っている。オリジナルの建設年代は不明であるが，現在のものは1967年に再建されたものである。クロスは市場の位置を示すものとして存在した。

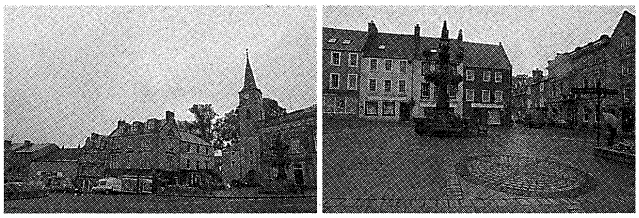


写真－51, 52　ハディントンのクロス

ハディントンは中世からの市場町であり，かつてはマーケット・ストリート，ハイ・ストリート，COURT STREET で市が開かれていた。COURT STREET の噴水付近では，現在も月1回土曜日に農作物の市が立つ。クロスの上に載っている像は，ユニコーンである。

x） ジェドバラ JEDBURGH（GBR-05-26）

ジェドバラはスコットランド南部の小都市である。ここにはかつて市場が開かれた場所（マーケット・プレイス）を示すマーカト・クロスが建っている。建設年代は不明である。クロスは，5つの主要な道路の交差点，戦略的・商業的にも町の中心の場所にある。マーケット・プレイス以外にも様々な場所に馬市場，牛市場，コーン市場，肉市場などがあった。マーケット・プレイスは新しい職を探す人々が集まる場所でもあった。市の日は，マーケット・プレイスの中心に建つクロス周辺に，市場で働こうと大勢の人が集まった。広場の泉は，ヴィクトリア女王を記念するものである。クロス上部のユニコーンは，自治都市の武器ともいえる水を守っていた。配管は今でも残っているが，水源は涸れている。



写真－53, 54　ジェドバラのクロス

広場の下に埋まっている飾り板は，クロスの最初にあった露店の集まる位置を表している。現在も1, 2店舗は100年前と同じように，家族だけで店を営業している。

xi） リッチモンド RICHMOND（GBR-05-28）

イングランド北東部のリッチモンドにはイングランド最大のトリニティ教会広場（マーケット・プレイス）があり，そこにオベリスク状のクロスが建つ。現在のものは1771年に建設されたものであるが，オリジナルの建設年代は不明である。クロスは市場の開かれる場を示している。

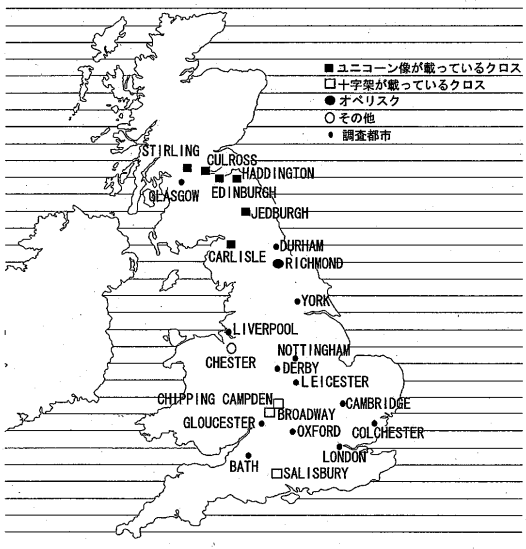
写真－55, 56　リッチモンドのクロス

ローマ時代以降に造られた石城としては，英国最古といわれるリッチモンド城下に広がるマーケット・プレイスを中心に，町は放射線状に広がっている。町の中心地，マーケット・プレイスでは現在も毎週土曜日に市が立ち，賑わっている。

広場には，トリニティ教会がある。この教会の特色は，北の側廊に店があることである。使われなくなった側廊に店を置く習慣は，今に続いているが，おそらくイングランドではここのみであろう。現在は建物の一部が博物館となっている。

マーケット・プレイス中央のクロスは独特で，ジョージ王朝最盛期の1771年に建てられたオベリスクである。このオベリスク上部には，かつて十字架が付けられていたかもしれないが不明である。クロスの下は12,000ガロンの水を貯められる貯水池で，その水は町の様々な場所にパイプで運ばれていた。

② クロスの形態



図－17　クロスの分布図

i）　地域別・形態別にみたクロス

図－17から，クロスはグレート・ブリテン島の各地に見られることがわかる。その形態は一様ではないが，上部にユニコーン像が載るクロスと十字架が載るクロスの2種類に分けることができる。その2種類の分布は，イングランドとスコットランドの境界付近で分けることができる。

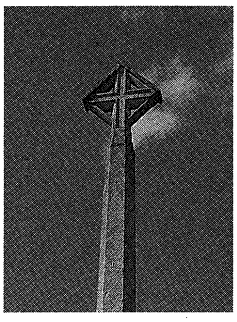
a）　ユニコーン像が載っているクロス

スコットランド側のクロスは，ユニコーンが載っているものがほとんどであった。（ジェドバラ，ハディントン，エジンバラ，クルロス，スターリング，カーライル）これらの都市は全て，旧もしくは現在，スコットランドに属する。さらにジェドバラ，エジンバラ，クルロス，スターリング，カーライルはスコットランドの王立自治都市であった。そうしたことから，このユニコーン像はもと王立自治都市の象徴として作られたものではないかと考えられる。しかしユニコーン像とクロスの制作年代が一致しないことも多く，ユニコーン像以前は十字架が載っていたことが確認できるクロスもあった。

写真－57　ユニコーン像

b）　十字架が載っているクロス

現在も十字架が残るクロスとして，ソールズベリー，ブロードウェイ，チッピング・カムデンが挙げられる。十字架はキリスト教の象徴であり，これらのクロスは宗教的意味合いをもっていると考えられる。しかし，現在はブロードウェイのMEMORIAL CROSSのように，記念碑として存在するものであったり，ソールズベリーのように十字架がとても小さかったりと，教会の十字架のような役割というよりは，他の意味や役割を含んだものであるといえる。



写真－58　十字架が載っているクロス。

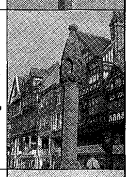
c）　クロスの分布について

ユニコーン像が載るクロスと十字架が載るクロスの分布の境界が，スコットランドとイングランドの境界である理由として，かつてスコットランドが独立国であったことと，そのために大陸からの文化影響を直接的に受けにくかったことが考えられる。スコットランドはアングロ＝サクソン時代の終わり頃から17世紀前半まで，ひとつの国として独立していた。おそらく，スコットランドはこの時期に自国の文化の中心核を形成し，発展させたと考えられる。国の中の主要都市を“自治都市”を定める法律も，スコットランド独特のものだった。また，表記・発音も英語と異なり，イングランドではMarket Crossであり，スコットランドではMercat Crossである。

ii）　役割別にみたクロス

今回調査した各都市において，全てのクロス周辺が，かつての町の中心地であったことがわかった。つまり，クロスは町の中心地点を指していたといえる。そしてクロスは，それ以外にも，その長い歴史の中で多くの役割や意味を兼ね備えることになったと考えられる。クロスの役割は大きく2つに分けられる。ひとつは聖像としての役割，もうひとつは標識としての役割である。さらに，その標識としてのクロスは4つの役割に分類できる。a）市場の中心地点，b）公開処刑の場所，c）公的な布告の場所，d）自治都市の象徴である。

図－18 クロスの形態のリスト

都市名	地域	建てられた年号	クロスの形態	クロスの意味	クロスの写真
SALISBURY	イングランド南西部	1335年	十字架が載っている（あずまや型）	市場の開かれる場所	
BROADWAY	イングランド中央部	1251年頃（推定）	十字架が載っている	記念碑，旧市場の開かれていた場所，旧就職活動地点	
CHIPPING CAMPDEN	イングランド中央部	不明	十字架が載っている	旧市場の開かれていた場所，聖像的役割	
CHESTER	イングランド中西部	1407年	簡素，六角錐の石が載っている	旧市場やイベントの開かれていた場所， 街の中心地点，元公開処刑場所，元公的布告地点	
CARLISLE	イングランド北部	1682年， 1988年（再建）	ユニコーン像が載っている	旧市場の開かれていた場所	
RICHMOND	イングランド東部	1771年	オベリスク型	市場の開かれる場所	
STIRLING	スコットランド中央部	不明	ユニコーン像が載っている	旧市場の開かれていた場所，元処刑場所，元公的布告地点	
CULROSS	スコットランド中央部	1588年（基壇部のみ）	ユニコーン像が載っている	旧市場が開かれていた場所	
EDINBURGH	スコットランド中央部	1365年	ユニコーン像が載っている	旧市場が開かれていた場所，商人の取引地点，街の中心地点，元公開処刑場所，元公的布告地点	
HADDINGTON	スコットランド中央部	1967年（再建）	ユニコーン像が載っている	市場が開かれる場所	
JEDBURGH	スコットランド南部	不明	ユニコーン像が載っている	旧市場の開かれていた場所，旧就職活動地点	

〈聖像としてのクロス〉

a） キリストの象徴

“Cross” という言葉には，十字，十字架という意味がある。十字架は，キリスト教の象徴であり，イエス・キリストの象徴的表現とされている。今回調査した広場にあるクロスもその名前から，キリスト教とのつながりが考えられる。

イエス・キリストの図像表現に関しては，もともとそうしたことへの是非の問題があり，聖書には神像を作って拝むことの禁が繰り返して記されていた。そのため，初期キリスト教時代，キリストの表現は原則として記号的・象徴的表現にとどめることとなり，象徴によって間接的に表現されていた。

そうしたキリストの「象徴には数種ある。（略）キリストのギリシア語綴りの最初の2文字であるX（キー）とP（ロー）の組合せ文字，キリストが初めであり，終りであることを示すA（アルファ）とΩ（オメガ）などがある（クリスモン）。また中世末期から用いられたJHS（略）もこれに類する。次に抽象文としてふつうに見られるものは，十字，十字架，およびそれらのさまざまな変化」したもので，「具象的なものには錨（略），魚（略），羊（犠牲の獣）などがあり，中世盛期になってさらに獅子，ペリカン，フェニックス，鷲，一角獣（ユニコーン）などが加わる。」「このような象徴的表現法は，後世になっても聖像表現を否定する立場（略）がこれを踏襲し続けた」。（資料019「イエス・キリスト」柳　宗玄）スコットランド側で見られるユニコーン像を載せたクロスもその一例であると考えられる。

キリスト教のグレート・ブリテン島への伝播は2世紀末頃と考えられている。その後，宣教師等の布教活動などにより，その頃ブリテン島に住んでいたピクト人やケルト民族であるブリトン人などに徐々に拡がっていった。やがてキリスト教はブリトン人に広く定着し，5世紀にはブリトン人が南方ピクト人を改宗させるまでに至った。

「キリスト教はピクト人の芸術に刺激を与え，土着のノーサンブリア人とアイルランド人の装飾様式を結合させて，目に鮮やかな十字架を刻んだ石版を作らせた。」（資料107）とあるように，おそらく，この頃の装飾的な石版や石像が，聖像崇拝のはじまりを告げるものであり，グレート・ブリテン島での十字架，そして広場におけるクロスの起源であると考えられる。また，引用にあげた「アイルランド人の装飾様式」とは，アイルランドに多く見られるハイ・クロスのことを指していると思われる。

b） ハイ・クロスについて

ハイ・クロスとは，アイルランド独特の十字架像を指す。アイルランド東部に数多くあり，グレート・ブリテン島の北部や西部にも見られる。また，それらは平地だけでなく高地でも見られる。

写真－59 ハイ・クロスの形態
http://www.katayama-family.net/photo/ireland/img 024.html より

ハイ・クロスの頭部は通常，輪もしくは，小さな光をかたどった装飾が載っている。この輪には，象徴的な意味が含まれていると考えられている。

ハイ・クロスは，木で作られたのがもともとの姿であるが，他民族の略奪などから守るために，ブロンズ製のもの，石造のものなどに替わり，現存するものは後者が多い。そして，「ハイ・クロスは，信徒たちがひざまずく中心として使われていた」（資料108）とあるように，宗教的なシンボルとしての機能をもっていた。その形態と機能が，グレート・ブリテン島にもたらされたと考えられる。

〈標識としてのクロス〉

a） 市場の標（しるし）としてのクロス

市場は都市生活の中心であり，町の中心部にあった。そしてクロスはその市場を指す標識としての役割を担っていた。市場は，それをもたない都市はないほど，生活に密着した都市の機能であり，場所であるが，単に商業活動の中心であるばかりではなく，その地域の催しが行われる場でもあった。それらが発展して，縁日やカーニバルといった祝祭的・芸能的な要素が後にみられるようになる。

「市場は，都市と村落の人々の相互交流の場でもあり，物と人との集散の場，情報の集散の場であった。市が開設された場所として，教会の庭，門前，宗教的権威の下に保護された場所，広場などがあげられる。」（資料019「市」藤井せい子）と述べられているように，市場と教会は密接なつながりをもち，実際ブロードウェイの史実には，修道院の許可により市がはじまったとある。

また，クロスではないが大陸側にも似た例がある。「北ドイツの都市の市場にはローラン（ローラント）の像が建っているが，これは都市の特権と自由のしるしであり，市場平和のしるしとしての十字架も同様の意味をもっており，

時には王が市場の自由を承認したしるしとして，この十字架に手袋がかけてあった。市は，カール大帝以来，開市権が王の大権に数えられてから，王の特許状を得て初めて市の開設が認められていた。かつて武装した集団の食糧補給・休息の場であり，祭礼の場所であった市は平和の場所として位置づけられていたが，市場平和はこの市場領域としての性格に負うものであり，市を訪れる者に平和が保障されていた」（資料019「市」阿部謹也）。前半で述べられている「広場の十字架」はグレート・ブリテン島におけるクロスを指し，クロスは市場の平和や市民の幸せを願う意味ももっていたと考えられる。

b） 裁判や処刑場としてのクロス

都市における市場の重要性は既に述べたが，そのため市場は集会の場であり，裁判の場ともなった。そのため裁判にかかわる建物，市参事会館や議会場，教会が市場に面して建てられていることも多かった。

スターリングの史書には，広場での裁判の状況について，「空の下，机といすが置かれ，囲いがしてある中で開かれるのが古くからの慣習であった」とある（資料084）。

さらに，市場は処刑の場でもあった。ほとんどの都市市場にはさらし台や絞首台がおかれ，公開処刑が行われていた。処刑は市の開催日に行われることが多く，見せしめの意を含んだと考えられる。

c） 公的な布告の場としてのクロス

クロスは公的な布告がされる場所としても使われていた。エジンバラ，チェスター，スターリングの3都市では，かつて公布が行われていた。そのひとつであるスターリングの史書には，公布は町のふれ役がクロスの基壇上に立ち，ベルを鳴らし行ったことが記され，クロスのベースが段状になっている理由とも考えられる。エジンバラ，チェスターでは昔からの伝統を受け継ぎ，現在もクロスの下で公布を行っている（チェスターでは夏のみ）。もちろんかつてと比べ公布の重要性は薄まったが，一種のパフォーマンスとして行われている（資料084）。

d） 自治都市の象徴としてのクロス

「マーカト・クロスは自治都市の中心的な地点に備え付けられたものであった」（資料084），また，「町が自治都市として認められる条件として，メインストリートは教会や城につながっていること，市場や監獄のあるところという原則があった。そのことから，自治都市は，都市の権力や誇りを示すシンボルである，刑務所やマーカト・クロスといったものに，財源を惜しげもなく使う傾向があった。今日，それらに建造物によって，都市の風景も価値が高められているともいえる。」（資料084）とある。

クロスが自治都市の象徴とされた時期がいつ頃かは不明であるが，スコットランド自治都市の象徴とされたことは確かであり，ユニコーン像がその意味を強く示していると考えられる。

iii） ま と め

ヨーロッパの中世は，各地で都市が再興，建設された時代であり，その多くは，広場を核とした都市形成が行われていた。中世の都市において，広場は商業活動の中心としての市場広場の役割の他に，宗教上の神聖な儀式の場であり，市民が市政に関する決定のために参集したり，裁判や処刑などが行われたりする，政治的な公開行事の場でもあった。さらに加えて，象徴的意味合いをももつ場所であった。

そうした場に建てられたクロスは，もともとの起源としては聖像としての意味合いをもつものと考えられる。その後クロスの建つ場所こそが町の中心地となり，政治，経済の中心であり，町のシンボル的形態をも併せもつ，重要な造形物としていくつかの要素を意味づけられるようになっていったのであろう。

（9） おわりに

19回続いた海外都市広場調査の締めくくりがイギリスであったことはどのような意味があるであろう。調査開始当初の視点からも，イギリスを最後に位置づけていたことは確かである。そのイギリスで出会った広場は多くは街路型広場とその複合タイプで，いわゆる広場の典型的な形態である矩形の広がりのある対象は，ガーデン・スクエア型の半ばプライベートな広場であり，本格的な矩形広場が少なかった点に物足りない感がある。しかし，そのような広場であるからこそ，広場の象徴的な造形物であるクロスが意味をもってくるのかもしれない。

広場を広場らしくするための要素とは教会の鐘楼であったり，城門の上に建つモニュメントであったり，市庁舎の時計塔であったり，おおかたは建物の上に建つ目立つ造形物であるのに比べると，イギリスのクロスは象徴的な造形物としては非常に地味な存在である。そんな対象が最後の調査の成果として浮かび上がってきたことにも，何らかの意味があるのであろう。

これからの課題として，これまでの調査結果の総合化を図ることがあげられるが，そうしたときに今回の調査が意味あるひとつの類型として位置づけられるよう考えてゆきたいと思っている。

参考文献一覧

001. MICHELIN GREAT BRITAIN & IRELAND, MICHELIN TRAVEL PUBLICATIONS, 2000
002. THE GREEN GUIDE SCOTLAND, MICHELIN TRAVEL PUBLICATIONS, 2001
003. THE GREEN GUIDE GREAT BRITAIN, MICHELIN TRAVEL PUBLICATIONS, 2003
004. THE GREEN GUIDE LONDON, MICHELIN TRAVEL PUBLICATIONS, 2003
005. THE GREEN GUIDE THE WEST COUNTRY OF ENGLAND, MICHELIN TRAVEL PUBLICATIONS, 2002
006. URBAN DEVELOPMENT IN WESTERN EUROPE: THE NETHERLANDS AND GREAT BRITAIN, E. A. GUTKIND, THE FREE PRESS, 1971
007. ロンリープラネットの自由旅行ガイド 英国，デイビッド・エルス他，メディアファクトリー，2003
008. THE NATIONAL GEOGRAPHIC TRAVELER イギリス，クリストファー・サマビル，日経ナショナル ジオグラフィック社，2004
009. 地球の歩き方　A 03　ロンドン，地球の歩き方編集室，ダイヤモンド・ビッグ社，2005
010. 地球の歩き方　A 02　イギリス，地球の歩き方編集室，ダイヤモンド・ビッグ社，2004
011. 地球の歩き方　アイ・マップ・ガイド②　ロンドン，地球の歩き方編集室，ダイヤモンド・ビッグ社，1999
012. 地球の歩き方　A 04　スコットランド，地球の歩き方編集室，ダイヤモンド・ビッグ社，2005
013. ロンドンのマーケットに行こう，松村美賀子，東京書籍，2003
014. 旅名人ブックス 7　ケンブリッジ・東イングランド，田辺雅文　他，日経 BP 社，2003
015. 旅名人ブックス 46　イギリスの田舎町，阿部泉　他，日経 BP 社，2002
016. 旅名人ブックス 66　北イングランド，須藤公明　他，日経 BP 企画，2004
017. 読んで旅する世界の歴史と文化　イギリス，小池滋　他，新潮社，1992
018. わがまま歩きツアーズ　05 イギリス，ブルーガイド海外版編集部，実業之日本社，2005
019. 世界大百科事典，日立デジタル平凡社，1998
020. イギリス　小さいまち紀行，淺岡敬史　他，グラフィック社，1996
021. 都市を造る住居，香山壽夫，丸善，1990
022. 個人旅行 25　イギリス，服部達哉　他，昭文社，2003
023. ヨーロッパ建築案内 3，淵上正幸，TOTO 出版，2001
024. 世界遺産を旅する 3　フランス・スイス・イギリス・アイルランド，大橋竜太　他，近畿日本ツーリスト，1997
025. 世界の建築・街並みガイド 2　イギリス/アイルランド/北欧 4 国，渡邊研司　他，エクスナレッジ，2003
026. 新版　世界各国史 11　イギリス史，川北稔他，山川出版社，1998
027. イギリス歴史地図，マルカム＝フォーカス，ジョン＝ギリンガム，東京書籍，1990
028. 図説　英国史，石川敏男，ニューカレントインターナショナル，1987
029. グローバルワイド　最新世界史図表，第一学習社編集部，第一学習社，2000
030. もうひとつのイギリス史，小池滋，中央公論社，1991
031. ロンドン　ミシュラン・グリーンガイド，実業之日本社，1995
032. 感性の都市空間　ロンドンのガーデン・スクェアー，宍戸修，相模書房，1992
033. ロンドン　地主と都市デザイン，鈴木博之，筑摩書房，1996
034. ピトキン・シティ・ガイド　バース，ヴィヴィアン・ブレット，ジャロルド・パブリッシング，1999
035. BATH, R. A. L. SMITH, B. T. BATSFORD LTD., 1944
036. BROADWAY PICTORIAL COLLECTORS EDITION, C C HOUGHTON, DARIEN-JONES PUBLISHING, 2004
037. BROADWAY A VILLAGE HISTORY, DEREK PARSONS, THE CORNMILL PRESS, 1996
038. ジャロルド観光ガイド・大学都市　ケンブリッジ，SALLY KENT, JARROLD PUBLISHING, 1998
039. ジャロルド・ガイドが案内するウェールズの首都　カーディフ，ROGER THOMAS，ジャロルド・パブリッシング，2004
040. A HISTORY OF CARLISLE, SYDNEY TOWILL, PHILLIMORE & CO., LTD., 1991
041. CARLISLE IN CAMERA, CUMBRIA COUNTY LIBRARY, CAREL PRESS, 1988
042. ピトキン・シティ・ガイド　チェスター，MAGGIE O'HANLON，ジャロルド・パブリッシング，2001
043. 2000 YEARS OF BUILDING-CHESTER'S ARCHITECTURAL LEGACY, STEPHEN LANGTREE & ALAN COMYNS, THE CHESTER CIVIC TRUST, 2001
044. CHESTER CATHEDRAL, BERNIE SHEEHAN, JARROLD PUBLISHING, 2003
045. CHIPPING CAMPDEN TOWN TRAIL, CLAIRE SANDRY, THE CAMPDEN SOCIETY
046. THE COTSWOLDS, ANTHEA JONES, PHILLIMORE & CO., LTD., 1994
047. CULROSS, PHIL SKED, NATIONAL TRUST FOR SCOTLAND, 1991
048. DERBY MARKETS COMMEMORATING 850 YEARS: 1154 HENRY ll-2004 ELIZABETH ll, DERBY CITY COUNCIL
049. DERBY PAST, EVELYN LORD, PHILLIMORE & CO., LTD., 1996
050. DISCOVERING DURHAM CITY A FASCINATING TRAIL AROUND AN HISTORIC CITY, ANNE ENGLISH, COUNTY DURHAM BOOKS, 1999
051. DURHAM HISTORIC AND UNIVERSITY CITY, MARGOT JOHNSON, JARROLD PUBLISHING LTD., 1997
052. DURHAM 1000 YEARS OF HISTORY, MARTIN ROBERTS, TEMPUS PUBLISHING, 2003
053. DURHAM CATHEDRAL, MICHAEL SADGROVE, JARROLD PUBLISHING, 2005
054. エディンバラ城，CHRIS TABRAHAM, HISTORIC SCOTLAND, 2004
055. ピトキン・シティ・ガイド　エディンバラ，ヴィヴィアン・ブレット，ジャロルド・パブリッシング，2001
056. THE ROYAL MILE, TOM BRUCE-GARDYNE, COLIN

BAXTER PHOTOGRAPHY LTD., 2003
057. OLD EDINBURGH VIEWS FROM ABOVE, JOHN A.JONES, STENLAKE PUBLISHING, 2002
058. A GUIDE TO THE ROYAL MILE, GORDON WRIGHT, STEVE SAVAGE PUBLISHERS LTD., 2005
059. UNE VISITE DE LA CATHÉDRALE DE GLASGOW, THE COMPUTER PUBLISHING UNIT OF THE UNIVERSITY OF GLASGOW, 2000
060. GLASGOW THEN AND NOW, RUDOLPH KENNA, FORT PUBLISHING LTD., 2005
061. GLASGOW, IAN MITCHELL, LOMOND BOOKS, 2001
062. HISTORIC GLOUCESTER, PHILIP MOSS, NONSUCH PUBLISHING LTD., 2005
063. GLOUCESTER CATHEDRAL, LOWINGER MADDISON, JARROLD PUBLISHING, 1999
064. GLOUCESTER A PICTORIAL HISTORY, JOHN JUŘICA, PHILLIMORE & CO., LTD., 1994
065. HADDIINGTON OLD AND NEW, GEORGE ANGUS, EAST LOTHIAN COUNCIL LIBRARY SERVICE, 2002
066. OLD JEDBURGH, JUDY OLSEN, STENLAKE PUBLISHING, 2003
067. MORE MEMORIES OF LEICESTER, KEN WHEATLEY, TRUE NORTH BOOKS LIMITED, 2000
068. NOTTINGHAM CITY CENTRE ON OLD PICTURE POSTCARDS, GRENVILLE JENNINGS, REFLECTIONS OF A BYGONE AGE, 2001
069. NOTTINGHAM'S TRAMS & TROLLEYBUSES, DAVID J OTTEWELL, NOTTINGHAMSHIRE COUNTY COUNCIL, 2000
070. ピトキン・シティ・ガイド　オックスフォード，ヴィヴィアン・ブレット，ジャロルド・パブリッシング，2000
071. THE HIGH, PHILIP OPHER, HERITAGE TOURS PUBLICATIONS, 1993
072. THE OXFORD COLLEGE, PHILIP OPHER, HERITAGE TOURS PUBLICATIONS, 2002
073. A BRIEF HISTORY OF OXFORD, PHILIP OPHER, HERITAGE TOURS PUBLICATIONS, 1997
074. RICHMOND AT THE START OF THE 21st CENTURY AN ARCHITECTURAL HISTORY, MARK WHYMAN, BARGATE PUBLICATIONS, 2003
075. RICHMOND NORTH YORKSHIRE FROM LOW UP IN THE AIR, AUDREY CARR, AzteC, 2002
076. A LOOK AT RICHMOND, JOHN RYDER, WELBURY PRESS
077. RICHMOND CASTLE EASBY ABBEY, JOHN GOODALL, ENGLISH HERITAGE, 2001
078. THE PITKIN CITY GUIDES SALISBURY, JENNI DAVIS, PITKIN UNICHROME LTD., 1999
079. SALISBURY CATHEDRAL, CANON DAVID, JARROLD PUBLISHING, 1999
080. SALISBURY PAST, RUTH NEWMAN & JANE HOWELLS, PHILLIMORE & CO., LTD., 2001
081. SALISBURY THE CHANGING CITY, BRUCE PURVIS, THE BREEDON BOOKS PUBLISHING COMPANY LIMITED, 2003
082. スターリング城，リチャード・フォーセット，HISTORIC SCOTLAND, 2001
083. ARGYLL'S LODGING & MAR'S WARK-STIRLING, DOREEN GROVE & RICHARD FAWCETT, HISTORIC SCOTLAND, 2002
084. DISCOVER OLD STIRLING, CRAIG MAIR, LIBRARIES COMMUNITY SERVICES, 2000
085. ピトキン・シティ・ガイド　ヨーク，アンジェラ・ロイストン，ジャロルド・パブリッシング，2000
086. ピトキン・ガイド　ヨーク大聖堂，J. TOY & Mrs A. WILLEY, PITKIN UNICHROME LTD., 1999
087. THE BARS AND WALLS OF YORK, R. M. BUTLER, YORKSHIRE ARCHITECTURAL AND YORK ARCHAEOLOGICAL SOCIETY, 1974
088. BEDERN HALL AND THE VICARS CHORAL OF YORK MINSTER, RICHARD HALL, A YORK ARCHAEOLOGICAL TRUST PUBLICATION, 2004
089. 2000 YEARS OF YORK THE ARCHAEOLOGICAL STORY, RICHARD HALL & PATRICK OTTAWAY, YORK ARCHAEOLOGICAL TRUST, 1999
090. YORKSHIRE FROM ABOVE, ADELE McCONNEL, MYRIAD BOOKS LIMITED, 2002
091. http://www.visitbritain.com/VB 3-ja-JP/destinationguides/england/, VISITBRITAIN, 2005. 6. 29
092. http://www.visitderby.co.uk, DERBY CITY COUNCIL, 2005.7.18
093. http://www.derbycathedral.org/, DERBY CATHEDRAL, 2005. 7. 18
094. http://www.derbyphotos.co.uk, DERBY PHOTOS, 2005. 7.18
096. http://www.uknow.or.jp, UK KNOW, 2005. 7. 11
097. http://www.glasgow.gov.uk/, GLASGOW CITY COUNCIL, 2005. 7. 19
098. http://www.undiscoveredscotland.co.uk,index.html, UNDISCOVERD SCOTLAND, 2005. 11. 4
099. http://www.the-cotswolds.org/top/japanese/know/villages/gloucester/index.html, コッツウォルズ観光局, 2005. 6. 29
100. http://www.gloucester.gov.uk/libraries/template/page.asp, GLOUCESTER CITY COUNCIL, 2005. 6. 29
101. http://www.leicester.gov.uk/, LEICESTER CITY COUNCIL, 2005. 11. 4
102. http://en.wilkipedia.org/, WILKIPEDIA, 2005. 11. 10
103. http://www.udit.co.jp/uk21.htm, 2005. 11. 17.
104. ケルト歴史地図，ジョン・ヘイウッド，東京書籍，2003
105. ヨーロッパ歴史地図，M. アーモンド　他，原書房，2001
106. ロンドン歴史地図，ヒュー・クラウト，東京書籍，1997
107. 世界歴史大系 イギリス史　先史～中世，青山吉信　他，山川出版社，1991
108. THE GREEN GUIDE IRELAND, MICHELIN TRAVEL PUBLICATIONS, 2003（本文中の日本語訳は鴨居朋子による）
109. OLD ORDNANCE SURVEY MAPS THE GODFREY EDITION, ALAN GODFREY MAPS

（あしかわ　さとる　　生活環境学科）
（かねこ　ともみ　　生活環境学科）
（たかぎ　あきこ　　生活環境学科）
（かもい　ともこ　　生活環境学科平成 17 年度卒業生）